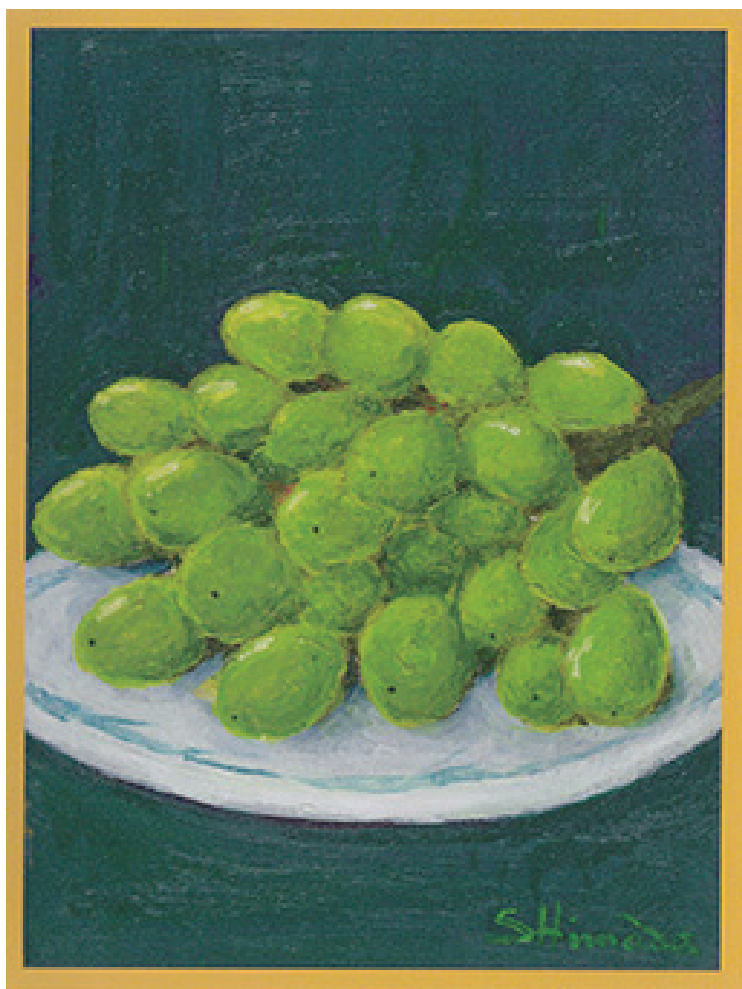


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第八号（通卷七七四号）



8月号・2026年

冬雷短歌会

冬雷ネット歌会



冬雷について



Web 冬雷



大山敏夫のページ



冬雷ネット歌会



冬雷 Web 広場



短歌投稿欄



リンク



入会案内

冬雷ネット歌会

冬雷短歌会の「ネット歌会」会場です。

閲覧はどなたでもできますが、歌会への出詠とコメントの投稿は冬雷会員のみに限定させていただきます。

投稿の際は「冬雷」誌上名をお願いします。
(匿名・ハンドルネームを禁止)

冬雷ネット歌会に集い、大いに勉強しましょう。

歌会参加の方はこちらから

(入室にはパスワードが必要です)

2026 年 8 月 目次

電子書籍運用へ	1
〈応接室……特別作品〉	岩崎聰之介… 2
冬雷集	4
作品一	22
八月集	38
作品二	46
作品三	56
六月号冬雷集評	桜井美保子… 19
編集者の本造りを詠った短歌	高橋輝次… 20
六月号十首選 (冬雷集・六月集)	35
六月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見… 36
六月集評	鈴木やよい… 42
六月号十首選 (作品一・作品二・作品三)	43
六月号作品二評	井上蒼子・江波戸愛子… 44
六月号作品三評	山本三男・橘 美千代… 54
大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記⑤	大山敏夫… 62
金子貞雄歌集『時のクレバス』を読む	桜井美保子… 64
歌集 / 歌書御礼	編集室・佐藤靖子… 65

ペーパーレス化

電子書籍運用へ

大山敏夫

ちよつと刺激的な表題となっているが今すぐどうなるという話ではない。

ペーパーレス化が実現すれば画期的に運営費用が抑えられる。現状のように、紙に印刷し、製本し、値上げ一方の郵送問題にも頭を抱えなくてよくなるだろう。そもそも在宅のままで、毎月自分の作品の掲載された冊子が届き、自宅で寛いでそれを読むなど、贅沢なのだ。贅沢なことにはそれなりの費用が掛かる。

しかし現歌壇の多くの結社は殆どがその運営経費の捻出に骨身を削っている。月々二〇〇ページを越える雑誌をつくり続けてきた或る結社。最近は本文一八〇ページ程に減少し、編集後記付近には、運営資金への寄付を盛んに呼びかけるようになっていた。会員五〇〇名を越す大雑誌ですら、安泰ではないのだ。

小誌も、出詠者数一〇〇名の壁を前面

に打ち出して、意識的に欠詠防止を呼び掛けていたが、半年経て、すでに約4名程度の減少がある。たぶん年末には百名に欠けるだろうと予想している。そういう状況で、なお健全なる運営態勢を維持させるにはどうするか？ 実行する対策はすべて後手後手ふうに見える。

さて表題に戻すが、実は歌壇でもついにペーパーレス化の第一歩、紙に出した冊子と違うPDFデータを電子メールに添付して毎月送ってくる雑誌が現れた。勇氣ある行動と評価するのだが、気になるのはその受入側の対応である。歌壇の現状では、こうした新しい試みに応じるしつかりしたシステムが出来ていない。残念ながら小誌も、受贈した結社誌データをどう保管し、どう運用するかの構想がない。頂くデータの保管すらできない。受入側にそういう環境が整わないのに送りつけても結果的にそのデータはどういうことになるのか心配だ。〇〇協会とか〇〇クラブとか日本短歌雑誌連盟のような組織が先頭に立って旗を振って行か

ないと、大きな改善は望めまい。

勇氣ある決断をした誌の発行者と情報交換をしたが、知らないこと多々で目から鱗、勉強になった。どうやら自分達で制作する電子書籍データは、歌壇圏外とはなるものの、広く受け容れて保管運営してくれる窓口に寄贈、預けることになる。その窓口となる所が、国立国会図書館の中に存在する。そこでは電子書籍の受贈へ門戸を開き、さらに画期的に新しい効果的運用にも、力を添えてくれるのだ。左である。

○国立国会図書館

デジタルコレクション

ここからキーワードの「短歌雑誌」を入れて検索すると、管理する関連すべての情報が現れてくる見事なもの。きちんとシステムを構えているので何ら問題ない。ここを活用させて貰うのは有益この上ない、と思った。早速に係と打合せ、小誌月々の雑誌データを預ける道を調査した。小誌はPDFデータによる電子書籍化では、既に歌壇のリーダー格なのだ。

気仙沼・大島行

岩崎聰之介

加護あれとけふも跨がるバイクなり壊すな捕まるな蝶を殺すな

『螺旋階段』むかし捨てたる負ひ目ありて氏の歌碑大島に押し侘びむとす

加藤克己の第一歌集（昭12刊）、父の本棚にありし。

2900での此れがラストラン歌碑と海見むための旅指すは大島

八十四歳、何なきうちにバイク止めむ、そんなころ湧き来。

潮の氣にまみれつつ咲くヨツズミの之路虫寄せて崎の径に照る

ヨツズミはガマズミの方言、ガキの頃その実よう喰ひし。

食堂に刺身定食待つあひだ小豆欠氷喰ふ 久々に喰ふ

食堂は大島の南端、龍舞崎、その海に臨む崖の径の近辺にあり。

大渦に隣る渦々離れ渦岩礁呑んで荒しけふの崎の海

気象、海流によっては咆哮さへ聞かると、因つて龍の舞か。底見ゆる程に静かなる
日のあるとも——店主の話。

崎の祠に「岩手誉」が供へあり習ひならむよ素朴につづくはや

夏の陽に翳刻しつつ巨き岩礁燈台ちかく崎の海に座す

安波が丘の歌碑へは土、石の登り坂荷重前々ステップへ立ち騎りす

天辺は、くさはら広く寛がす、一処に碑、ぐるりサルスベリなどの立木。

指南の他何大島に魅せられけむ加藤克己はるばる数度も来たりしとふ

海見つる姿偲びて建てたるか克己歌碑東面す昼は翳るに

往時、大島には主宰せし「個性」の会員数多、彼らによる建立なりき（昭51・9・24）。

三十年まへの写真の克己歌碑 覆ふがにありし松いまはあらざる

眼つむればつねに海鳴りが聞こえて清き勇気を清き勇気を

——作者揮毫による陰刻。「海鳴り」は励まし、「清き」はためらひ無き、ならむ。

結句の勇垂れたる墨跡かそのままに三筋刻しあり 加藤克己歌碑

〈追記〉 令和八年 2900RSを近所の知

人に売却。バイクで遊ぶこと三十余年、
事故無く、違反歴なく終ふ。

〈「パレット」主宰〉



冬雷集

槍の名手高定（大友柳太朗）

桜井 美保子 神奈川

時代劇の古き映画をはからずも観ることになる五月六月
五月号の大友論に記さる「酒と女と槍」ビデオに探す
大友の演ずる富田高定の豪胆なる大笑ひは磨かれたる芸
千恵蔵の利長の鼓に侍の魂呼び戻す槍に舞ひつつ

槍の柄に妻結びたる赤きてがら解かず戦ふ縦横無尽に
関ヶ原の土に突き刺さる高定の太身槍映すラストシーンは
子供頃観ることなくて今やつと巡りあひたる映画幾つか
大友の生れし柱島に続く海と思ひつつ巖島の浜辺を歩く
俳優の死すとも映画は残りゐて観る者の心熱くさせたり

赤間 洋子 東京

母の日は心の奥で待ちてゐるカーネーションを持ちて来る子を
カーネーションの礼は新茶一袋毎年取り寄せ戸棚の中に
茶の値段単価はそのまま内容量大幅に減り実質値上げ
食品があれこれ値上りスーパーで手に取る品を戻すことあり

肉玉子魚野菜も果物も欠けてよきもの無き故悩む

独居でも規則正しく暮らしたい午前六時に目覚ましセット
目覚ましは鳴れば直ちに起きるけどたまに音消し気付けば七時
杖無しで歩ける幸せ感謝しつつけふも買物遠回りして

兼目 久 栃木

寒い日も暑い日もありし五月の日々春らしい気分通りすぎてをり
太陽が隠れるくらいやみとなる時刻降り来る雨を暗闇で聞く

中国で求め書の資料健在にしてわが机上を占む

杖ついて田舎の道を歩く人すたすた歩き元氣さ滋る

四月には寒いと感じず数日間暖かい日をありがたく感謝す

自家用車のありがたみが解りたり返上してわかる運転免許証

免許証の返上を申請す妻子供孫の言による

山あり谷ありての生活から車くるまなくてはの心境出づる

森 藤ふみ 東京

歩道橋渡らむと来れば向かうより下校児童の十人ほど来る
泰山木の花を撮らむと来たりしが下枝の蕾いまだほぐれず
草はらの向かうに立つは木か棒か上から下まで真つ白なり
側に来て名札を見ればヤマボフシ花につつまれ枝葉の見えず
生け垣の今年の手入未だなくフェンスを越えて伸びゆく枝葉

子と我とそれぞれ買ひたる野菜にて冷蔵庫の野菜室満杯となる
夜遅き食事すませて子の作る弁当用の人参サラダ

森林浴

櫻井一江 東京

正午過ぎ築地大橋あゆみ来て汗ぬぐひつつ浜離宮に入る
区民のみ四五月無料の浜離宮馴染みの顔なく群れ成す外国人
松の木の手入れする職人黙々と小枝手に取り一つ一つの作業
文化財の名のもと庭園の樹々に見る痩せ細り撓ふ形も有りて
静もれる潮入の池の向かうには汐留のビル高々屏風の如し
かん高きカラスの声にかき消されれど再び小鳥の囀り
浜離宮の広さに触れる森の道自然のままに蛇など出さう
都心でありながらこれ程の森林浴できる歴史の重みを思ふ

有泉泰子☆山梨

祖母かこみ叔父叔母父母と孫われら笑顔に並ぶ写真のいでくる
亡くなりし従弟幼く祖母の横に甘えて写る七十年前に
落合家唯一の男の子の誕生と愛され育ちし従弟逝きたり
従弟出版の『優しい肴』取出してありし日偲ぶ慎ちゃんと
自転車でクラス会へと行く夫を見送る空に満月の照る

青木初子 神奈川

台風の強き風雨に葉の枯れるジャガイモ抜けば芋二つあり

種芋の四倍程のジャガイモの二つ出で来るずつしり重し
薄皮を付けたるままの新ジャガを蒸かし夕食のテーブルに置く
庭に掘り蒸したるジャガイモほくほく口いっぱいに甘さ広がる
国有地9億円に売却され雑木林の一つ無くなる

多にありし杉の伐られて近くに住む杉花粉症の友は喜ぶ
売られたる雑木林の木々掘られ六三軒の宅地になると
ゴミあさる鴉の寝ぐらの雑木林更地になりて啼き声の減る

中村晴美 茨城

年金は六十八歳からと決めし夫なり今年の八月すぐ近くなる
三年も繰り下ぐる夫の年金の計算予想は赤字生活
七十五歳に申請予定のわが年金厚生のみを前倒しなるか
打ちたてと分かる蕎麦に当たりけり作り置き覚悟の道の駅なれど
夫婦して旨い旨いと蕎麦啜る田園眺むる道の駅にて
今は無き金砂郷町の蕎麦なれど常陸秋そばとブランド化さる
お隣の水戸の警報頻繁にスマホ震はす滝雨の中
水引きて土柔らかく抜き易く畑の草をひたすら引けり

橋本文子 鳥取

ばらの花桃色オレンヂ淡い色プリンセスミチコは明るい朱色
知らぬ間に季節進みて六月の紫陽花満開雨を待つなり

庭先に胡瓜トマトを作る幸初なりトマトの夏の趣

胡瓜苗すくすくのびてつるのばし掴まりどころ探して揺れる

山口 嵩 福島

射しきたる初夏の光にヤマボフシの白き総苞緑に映えゆく

真白な総苞よそほふヤマボフシ汗拭くやうにときに揺れをり

雨あがり緑深まる木々の間に白き際立てヤマボフシの花

阿武隈のたゆたふ流れに安らぎぬ昨日の怒りは吾の小心

阿武隈で泳ぎ戯るる子らをらず夏の風物年毎うせゆく

糸状の雨は道路を洗ひゆき側溝たぎらせ急ぎ流るる

ばたばたと窓うつ雨の半時間あがれば直ちに夏日戻れり

斜雨さりて乾きはじむる道端に九の字になりて蚯蚓よこたふ

吉田 綾 子☆ 茨城

キッチンの出窓に映る山もみじ優雅に揺れて夕光を散らす

つぎつぎと時季を守りて咲き盛る「咲き分けさつき」の色合い確か

大きな鉢に咲き初むる白いひまわりは播種より我が育てたるもの

咲き揃う白いひまわり品の良し夏日となるも涼感誘う

リハビリを始めて早くも六か月苦手な動作に指導の優し

「じゃ、またね」と手を振り帰る理学療法士に身体も心も癒されるなり

恐怖なる雷雨の予報にひまわりやトマトの鉢の移動に苦慮す

仕事なら仕方ないのか雷雨の最中ヤクルトレディ愚痴も言わずに

孫娘より水分補給の注意受く心がけるも未だ未だ未だ

酒向 陸 江☆ 東京

大型の台風六号雨激し雨戸を開けず一人籠れり

「この位の雨で学校休みとは!!」孫をあずかる友の電話は

庭隅に植えたるばかりのトマトの苗風雨にめげずしゃんと伸びゆく

大輪の紫陽花賜り床の間の備前に差せば壺の引き立つ

年重ね壺に見惚れる時の増す父の遺してくれたる備前

書道展に誘われ銀座まで出かく馴れない場所に緊張したり

仕事持ち書が続ける友の字の「佳妙」に深く人柄惚ぶ

天野 克彦 大阪

温かきみそ汁欲しと思ふ朝けふ母の忌日と気づきたりけり

梅雨入りを告げるこの夜は煌々と月照り渡る生駒やまなみ

公園にあそぶ子供らかはゆしと見てとほりたり齡のたけて

平均寿命過ぎて生きゐるわれ逝かば人は言ふらん大往生と

つばくろはわが窓さを翔び交へりくきくきと梅雨の晴れ間を

窓に見る生駒山脈たちまちに雲に覆はれ梅雨空となる

ひとり居の夕餉支度と机より立ち上がりたり頁を閉ぢて

ほしいままはびこり茂る庭草は機械に刈られ芝生となりぬ

梅雨の間の日照りまぶしき昼下り黄いろの蝶が土低く飛ぶ

高松 美智子☆ 栃木

「普通は」を口にする人への嫌悪感かつて私を縛りたる言葉
「ピッ」という電子音に認められスマホかざして決済をする
代掻きの済みたる田圃に雨降りてつがいの鴨をゆるり遊ばす
「きれいだね」「紫がいっぱい」先生と園児の会話がわが庭のぞく
水遣りを控えて日陰で休ませると金なる木の植え替え動画
手を掛けて目をかけ声掛け応えくるる庭のみどりのピグマリオン効果
再生を信じパッサリ枝落とす絡み合いたる柘植の一本
咲き満ちて立ち枯れてなおそのままだにこぼれ種に花継ぐノースポール

高橋 説子 栃木

夏椿は病みてゐるらし咲く花より落ちて重なる花倍もあり
大ホールに台風余波の風入りて総会資料のめくれる音す
一括り造花と言へば罪になるやうな緻密さ大輪の百合
機種変更の手続きカウンターに長居して冷氣ひたひた腰まで溜まる
三時間半経過するも終はらないスマホのデータ移行の難儀
音も無く手垢つきたるスマホから移行してゆく六年のデータ
アカウントデイベイスアドレスパスワードセット割ウィルス機種変大変

大塚 亮子 東京

釜鳴りの音を聞きつつ飲む抹茶障子戸越しの灯りの中に
帰りぎは懐紙に包んだ金平糖貰ひて母にと持ち帰りたり
金平糖母と食みつつ茶道の稽古あれこれ話し復習しをり
練炭にいつも湧きある湯を汲みて金平糖食む美味しかりにき
正座にも少しは慣れて先輩の点前拝見興味もちたり
先生の話聞きて先輩の動作真似るも難しかりき
色形美しかりき茶の湯菓子美味しさに惹かれ入会を決む

白鷺も飛ぶ 嶋田 正之 埼玉

林立のビルを遮り緑濃き広き皇居の林横たふ
窓外の音の聞こえず聖橋を観光舟の潜り抜けゆく
隅田川沿ひ並走の十両の総武電車線と中央線と
黒き川岸辺に連なる緑木に鳩カラス飛び白鷺も飛ぶ
三十年前に勤めしビルの見ゆ街の変貌思考を超えて
ビル群の中に埋もる議事堂の小さき姿威風のあらず
ストレッチャーに運びこまれて大腸のポリプ切除眠り居る間に
昼頃に麻酔を打たれ意識失せ目覚めて見れば夜中の十時
手術後の痛みは非ず粥飯の濃さ増しゆきて退院となる

江波戸 愛子☆ 埼玉

体操を休みて散歩に出でてゆく君を見送る昨日も今日も

抗がん剤しばらく休みと言われたる夫は医師に聞き直しおり
鉢中に静止している風ぐるま朝の光の未だ届かず
鉢植えの茄子に小さな実の二つあるぞと君は声弾ませて
友は猫わたしは犬を失いて共に暮らしし日を語り合う
カレンダー机の前に掛けておく今月の暦と来月の暦を
離島より届いた馬鈴薯いただいて蒸かせば旨しほのかな甘み
鹿児島に移り住みたる友の子のつけ揚げすこし蜜柑の香り

橘 美千代 新潟

五日前は正常なりし検査値が全て異常になぜと慄く
腹痛に三十九度の発熱し全身黄色く緊急入院
抗癌剤の副作用と思ひ中止せしも胆石ゆゑと母の胆管炎
入院の翌日には母の黄疸は消えたり胆菅ドレナージにて
庭の薔薇咲き盛る今ふたたびを主人の老女入院したり
母の日の鉢のカーネーション枯れずあり向かひの人の水遣りくれて
言葉のうへの陶醉さへも許せぬほど過酷な日々を送るかと言はる
窓の下にいちめん白く咲き満ちて山法師そのとがり咲く花

ブレイクあずさ☆ カナダ

太平の海に抱かるる島国が人を殺める道具を売ると
リベラルとデモクラシーの名を持ちてファシズム進める政党のあり

左にも右にもあらず 声上げる人はただただ平和を願う
百歳になりたるピアノの師を祝う五月の宵の空高く澄む
ピアノより離され銃を持たされて地雷の海を生き延びし師は
忘れっぽくなりましたよと師は笑いバツハのフーガをそらで弾きたり
もうひとつ祝いを送る師の国に民主政治の復活を見て
師の国の旋律弾くたび思い出すもう受けられぬレッスンの日々
辻に立ち抵抗の歌ウクレレと共に歌えば雨あがりたり

鈴 木 やよい 東京

バラ園への電車で気付く肝心のスマホは家で充電中と
バラ園で次は何処へと同級生「歩けるうちに」が身に迫りきて
台風の近づき予定はすべて消え朝から二人で大谷を見る
電車内隣で何やら読みふける女の子の本そつと覗き込む
まだ残る漫画をまとめて縛りゆく悟空は子らのヒーローなりき
あやめ草詠む和歌の墨色すがすがし最後の文字が斜めに寄り添ふ
アスファルトに濡れて張り付く栗の花を竹箒で掃く力を込めて
この栗は夫の祖父が植ゑしもの道に張り出し仕事を増やす
梅雨の朝重き瞼を閉ぢたまま吾を励ます歌を出さねば

中 村 哲 也 宮城

飽きもせず値上げの通知来たれるを飽きることなく社内に伝ふ

この頃は値上げの他に納期遅延ナフサ由来を理由に言へり
値上げならまだしも物の滞り物売る会社の勤めに憂ふ
世の中のナフサ由来の物不足影響ありやと問ふ人のをり
弁当の値上げは無くも飯の量少なくなりと同僚の言ふ
弁当の中身に添へる緑色ナフサ不足に「バラン」まだあり
それぞれが子の中総体の応援で弁当業者宅配休む
ゴロゴロと雷鳴れば道急ぎ濡れずにか地下鉄に乗る
大雨に地下鉄乗りて乗り継ぎに地上に出でて青空仰ぐ

山 本 三 男 ☆ 群馬

わが庭にレモンの木あり時折にアゲハが卵を産み付けて行く
幼虫は柔らかき葉を食うゆえにチョウは若葉に卵産み付く
幼虫は動かずにいる時多し葉の食われたる跡を残して
食うための苦勞をせずに暮らしている働かぬわれを社会は守る
柿の実是一目でそれと判るまで大きくなりぬ六月の庭
胴切りのサボテン二か月動きなく気長に時を待つよりはなし
役員の順番のきて止むを得ず神社の寄付をわれは集める
何軒か寄付を払わぬ家知れど一応声を掛けねばならず
埼玉で廃止されたる旧弊を群馬はいまだ続けると聞く

田 端 五百子 岩手

幼な児を馬上に眠らせチャグチャグ馬子映す早苗田青き風吹く
暗闇に動く全てが熊に見え夜間の自転車息切りて漕ぐ
二・三日見ぬ間に櫛の芽葉を広げ鋭い棘の小指さしたり
駄菓子屋に子等の寄り合ふ春の午後吊るせる笹に十円玉増える
トンネルを抜けて視界の開けたり谷合の町に桜吹雪けり
滅多には聞かぬ言葉よ「ありがたう」伯母の矜持に立ち入る介護

飯 嶋 久 子 ☆ 茨城

嵐去り水満々の田の中を抜き足差し足白鷺歩む
遠い国の地震による津波のおそれ半日テレビに警報流る
ふるさとのオリオン通りを走る熊終日テレビに放映さるる
さま変わりしたふるさと宇都宮テレビを覗つつ望郷の念わく
ふるさとに残りし甥らにラインするそちらの様子如何かと
一日に三千歩課すわがノルマ歩み行く道白つめ草多し
白つめ草冠にして遊びたる仲良しのあの子今いずこ

飯 塚 澄 子 東京

四十一にて漸く長男に生まれし横浜の孫趣味遠ざかる
祖母我に従ひ学ぶ吟詠の総伝・師範取りて現在
子に縁の無き孫夫婦と思はれしが令和八年二月の恵み
近くの師にピアノ習ひし孫は今ショパンの名曲暗譜の趣味に

都バスのなか乳母車引く男多し妻らしき人は小荷物を持つ隣りあふ庭より見えて紫陽花の赤紫への変化の樂し椿並ぶ庭に見てゐる新緑美日を浴び輝く五月の日々よ

江 藤 ひさ子 大分

真向法体操終へてティータイムこれからおしやべりお口の体操コロナより組体操は没基本体操後のおしやべり樂し真向法体操終へてゆつくりと葉桜を見つつ帰る大分河畔浴槽に両足伸ばしてグーチョキパーと指の開閉吾の恒例拙くも欠詠だけは罰と吾に鞭打ちて月々駆け込むポストそれぞれに格差はあれど劣化とは斯くなるものかと嘆く折りをり

戸部田 とくえ 福岡

雪の下あまたの花のゆるるさま々おとぎの国々に誘ひくるる見るほどに雪の下に群れて咲く清々しさの限りもあらず体調のすぐれぬ夫の眼差しの常なき虚ろな視線を憂ふこの夏も庭のどくだみぬき終へて梅雨入り前に乾燥させたりめづらしく夜半に蛙の声のして眠れずなれりあまりの嬉しさ気温差に戸惑ひつつも曇りくる午後には早目の夕餉の支度

稲 津 孝 子 福岡

白妙の四つの苞の蕺草の丈の揃ひて広がる庭のうへ

躓きさうになりて横を歩く人のああよかつたと言ひてくれたり鐘やみて遮断機あがる向かうより夫の歩いてきたる気のせりこの春は庭にて聞かざる鶯がゴルフの画面でたびたび鳴けり藤の祭すぎて人出の少なくて友の招きてくれたる武蔵寺棟の花知らざる友に池に来て花咲く枝を折る背のびをして草を取る横にて塀に跳ぶ蛙背なに見すぐの白き筋あり母作る姉と揃ひの服を着て肩くみ父の写真機に写りき

姉 川 素枝子 福岡

通るたび仰ぐ塔屋まだ伸ぶかいざといふ日の来ぬとは言へず久留米市に塔住居ふえ郊外は空家となりて雑草覆ふ人住まぬ家たちまちに草しげり売家の板に雨降り止まず空高く住むは如何なる人ならむ老若男女吾入る妄想儉約を修理を死語にするなかれ資源とぼしく地の震ふ国自衛隊が軍隊になる日近づけり階級呼称なぞると聞けり薬まだみつからずして幻視出で施設を出よと勤むあはれさ妄想を許して笑ひ親しみし人と別かると両手を握る咲く桜うまいと言ひては料理みすさやかな御数抓みあるとき

井 上 菅 子 山形

若草に朝露光りコンビニの明かりは昨日に続く照明

凍雪に開きたる舗装の穴埋めて地球の毀れは春に目立ちぬ
ゲリラ雷雨が車の屋根を連打する九十五歳の葬儀の終へて
大胆に崩れ落ちたる白牡丹感極まるといふにあらざるや
数千の胞子切り捨てわらびといふ菌朶をを好みて食ぶる民族
ドライブインの米に芯ある釜飯が思ひ出にあり消さねばならぬ
秩序正しく重なり合へるエケベリア明日育つ葉もかく做ふべし
帰化植物の黄の花盛る沿道の奥の明るき新興住宅
杉の梢を傾りて淡き山藤の紫見れば母思ふ色

井上 楨子 新潟

早早と茜に沁みる苞落とす白木蓮は空に向きつつ
春日さす電車に一人揺れをれば馴染みなき声は眠気を誘ふ
筈の成長早き一区画葉群は風に茶髪めきてそよく
活力剤入れたる瓶の水吸ひてカーネーションの細き茎震ふ
水無月に菖蒲湯沸かすを忘れをれば恒例のことと夫は戒む
裏山の似たもの有りて刈りくれば蓬も菖蒲も間違ひらしき
定例の大風合戦始まりて空中地絡め人ら駆け抜く
落下する風の轟音逃さむと促す友らと車走らす
因業も気力のうちと思ひをり病養ふ夫に向き合ふ

(☆印は新仮名遣い希望者です)

六月号 冬雷集評

桜井 美保子

初めての顔なつかしき顔円形に座りて
向かひあふ友のかほ 小林芳枝

本年三月の川越歌会出席の一連より。

歌会には大山敏夫氏を中心として主に埼玉在住の会員の方々が集まっている。作者にとっては久々の歌会。友らと顔を合せて会を進める喜びが温かく詠まれている。「顔」のリフレインが印象的。

御衣黄の花はさみどり八重の花揺れ止まざるを素早く写す 森藤ふみ

「御衣黄」は「ぎよいこう」と読む。桜では珍しい薄黄緑の花で、高貴な人の着る衣服に見立てて付けられた植物名であるという。優美な花の佇まいを感じさせる描写から一転、結句は簡潔でシャープである。作者の動きが見えるようだ。手みやげの餅菓ふたつを供へつつ孫と

二人で亡き人々に会ふ 有泉泰子
お孫さんとの墓参りの一連より。墓地は小平にありご両親が眠っておられる。

餅菓子供えて心の中で両親と対話されたのだろう。お孫さんと一緒のお参りは心強く嬉しいことだったと思う。

青い瞳の少女の所作に驚きぬ手水の作法を見事にこなす 天野克彦

ここに登場するのは外国の少女。よほど日本が好きで色々勉強している様子。神社参拝の折の手水の作法が身に付いているのだ。そしてその所作はとても美しい。驚きと感動が一首に籠っている。

人の声聞こえぬ朝の並木道あなたと歩くあなたの傍に 江波戸愛子☆

早朝の静かな並木道を二人で歩く。桜の時期であるようなので混み合う昼間よりも歩きやすい。下句には相手への信頼と愛情が感じられる。自然に率直に愛の心を詠んでいるところがいい。

副作用少なめといふ抗癌剤免疫チェックポイント阻害薬を母に 橘 美千代

癌の治療を受ける母のためにどのような薬がよいのか。迷った末に作者が選んだのは副作用の少なめのもの。「免疫チェックポイント阻害薬」は癌細胞を直

接攻撃するのではなく免疫細胞が持つ「癌と闘う力」を取り戻す薬で新しい治療法のようなだ。ご快復をお祈りします。

好物のまんじゅうなれど痛む歯を警戒しながら少しずつ食う 山本三男☆

歯に痛みがある時でも好きな菓子は食べたいものである。「警戒しながら」という言葉がユーモラス。がぶりとは食べべず慎重に少しずつ楽しんでいる。

小雨あたるビニール傘の向かうには土手の桜が滲みて続く 鈴木やよい

今年の花見の時期には晴れる日が少なかった。この歌でも小雨の日の桜を捉えている。透明なビニール傘を通して桜が滲んでいるように目に映った。情景の切り取り方が巧みで詩情を湛えている。

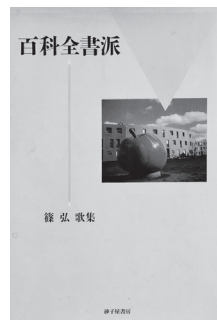
庭の角まがれば香りすると言ふ今年は蠟梅ながく咲きゐて 稲津孝子

庭の蠟梅もその年によって花の期間の長短があるのかもしれない。今年は長かったようで近くを通る人もその香りを楽しんだようだ。生活の一場面が伝わる。

短歌で編集者の本造りを詠う

篠弘の歌集から

高橋 輝次



私は俳句、短歌については全くの門外漢なのだが、今回は無謀にも古本で入手した歌人、篠弘の六冊の歌集から、ごくわずかの作品を引用しつつ、駄文を綴ってみよう。なぜ私がとくに篠氏に関心をもったかという点、氏が窪田章一郎に師事して『まひる野』代表を受け継ぎ、生涯に十冊の歌集を遺した高名な歌人であると同時に、小学館の編集者として活躍し、幹部になって四十四年間、定年まで勤めあげた人でもあるからだ。

まず簡単に氏の略歴から紹介しよう。昭和八年東京生れで、早稲田大学文学部国文科を卒業して昭和三十年小学館に入社。国語辞典や百科事典編集長を経て、取締役になる。社長室顧問を最後に平成十一年退社。その後、日本文藝家協会理事長などの要職を務め、令和四年八十九歳で亡くなった。年譜によれば、氏は六十七歳の折り、ペースメーカーを植え込むとあり、その関連の歌も数首ある。私も同様の身なので、いつそう身近に感じられるのだ。

私が架蔵するのは『至福の旅びと』『百科全書派』『凱旋門』『濃密な都市』『司会者』『神保町街』で、中でも前述の最後の歌集は、神保町にある小学館に通いつめた編集者としての日々の仕事や古書街のことを詠った作品を既刊歌集から抄出したもので、興味津々で読んでいた。以下に、主に『神保町街』から編集者の本造りの過程に沿ってその心情を折々に詠った作品を引用

して、それに私の一寸した連想をつけ加えておきたい。

○シュレツダーわが企画書を呑みて
裂く音かなしき焚刑よりも

(まず編集者は作りたい本の企画書を著者と相談して作り、編集会議に提出する。そこで議論されて没になったのだろうか。私も創元社に入社して駆け出しの頃は、意気込んで出した企画がなかなか会議で通らず、落ち込んだものである)

○企画練るほかなきわれに目守られ
てコピーの罅を黒蟻はしる

(実に細かい観察である)

○いざされし企画悉く否みたる会議
の終りに悲しみは来つ

(これは後年、上司の立場から部下の企画を裁断したものか? 若い編集者の企画が順調に通れば、それだけ将来の出版活動にも期待がもたれるというもの。ただし売行きは正直、出してみないと分らないのだが…)

○執拗にリライト重ね上塗りしうそ
ぶきたりし企画みのりつ

(これは出来上がった原稿なのか企画書のリライトなのか分らないが、後者とすれば、会議で一旦「保留」とされたケースで、編集者がどうしてもその本を出したいと熱望する場合、著者の有益な情報や営業上の有利な数字などを練り直して再提出し、ようやく周囲の賛意を得て具体化することは間々ある。編集会議は編集者の熱意が試される場でもあるのだ)

○出版の市場調査は当たらずと逆ら
ひて言う口火を切れば

(これも会議中の議論か。営業側の見方だと、過去の類似書の売行き結果だと否定的意見が多いが、本書はそれと一線を画したユニークなもので、売行きにも自信があると反論したのかもしれない)

○ゲラとともに戻る原稿反りかへり

無数の指紋かぎりも知らぬ

(これは現在のオフセット印刷と違って、まだ活版印刷の時代で、印刷所の植字工が原稿を片手にもって一字一字活字を拾うので、指紋が沢山ついたのではないか)

○読みあはす校正の声囁れゆきて直
接ならぬわれも痺るる

(私の場合、多忙になり外部校正者に依頼するようになる前は、ずっと自分で校正していた。二人ペアになつて読み合わせるのは、大出版社の雑誌編集部か新聞社の校閲部くらいではなからうか)

○美術書の帯にコピーを書き終へて
両手に掲げ立ち上がりけり

(本造りの最終段階に当り、オビのキャッチコピーは大抵、担当編集者が作成する。もつとも、他の著名人からもらった推薦文を使うこともあるが。書店で読者が最初に目に止める短文だから、売行きにもつながる

大事な作業だ。幾分誇らしげに周囲に指し示したのかもしれない)

○はじめての一冊を手にしあひひ
ザイン室に声満つるかな

(ようやく完成した本をデザイン関係者が初見した折の感激や喜びを詠んだものだろう。私も製作担当者から出来上がったばかりの本を見てもらったときはいつも感激したものだ。時に社長もわざわざ見に来られ、労をねぎらって下さったことを憶い出す。もつとも、大きな誤植のミスなどないかと心配したが)

○完結はつねに痛みをとまへり五
たび百科を編みたるものを

(たしかに辞典類はその時点では完結しても、つねに改訂してゆく必要がある。欠点や反省を伴うのである。氏によれば、百科事典の編集は内部だけでも八十余名のスタッフがいたそうで、そのリーダーとしての責任や苦勞が偲ばれる)

作品一

小林 芳枝 東京

あそぶ猫背伸びする猫坐る猫布団カバーに見ながら眠る
球形のサボテンに子のあらはれてびつしり親を囲みて溢る
右ひだり上下の部屋も何時よりか独り住まひにてしづかなり
葉のみどり茎のみどりの柔らかな二本のゴーヤ並べて植ゑる
物干し棹に端を結びて目の粗き網を張りたりゴーヤを植ゑて
食べるのが早いねと娘に言はれをり一人で食べる食事に慣れて
晴天と思ひて仰ぎみる夜の空は小暗く星ひとつなく
此処に立ち星を仰ぎてゐたるころ帰りの遅き子を待ちし頃
八十を過ぎたらねえと言ひながら受話器に九十歳の声若々し

正 田 フミエ☆ 栃木

時期はずれの夏日来たればエンドウの花の減りたり黄葉が目立ちぬ
入梅の前に数日三十度超えジャガイモの葉が黄に変わってくる
らつきょうの収穫少し早くしてエシャレットに似たシャキシャキを食む
植え付けのトマトの畝はらつきょうの後を拜いて有機石灰まく

花豆の栽培初めて挑戦す高地でないが半日陰にて
強風に花豆の蔓が切れたれど新芽を待つてしつかり止める
初めての花豆の花に見とれおり図鑑のように鮮やかな赤
これほどに鮮やかな赤の花咲かす花豆栽培癒される時

齊 藤 トミ子☆ 栃木

山の友が教えるに花の名を思い出したりうぐいす神楽
岩鏡まいづる草に岩団扇の花咲く山に友偲びおり
杉木立直ぐに立ちおり整然と並ぶ姿に我が腰伸ばす
何時もとは逆のコースの太平山初めて登る心地に登る
喘ぎつつ登りきたれる山頂のザレ場に咲ける駒草の花
悪口でなくて事実と妹は連れ合いの愚痴止め処なくする
レンジから煙もくもく上がりおり加熱し過ぎたキャベツ真っ黒

浜 田 はるみ☆ 埼玉

バス通りピンクのつつじ満開に続き白きつつじ咲き初む
露草や赤まんま見ると思ひ出す飯事遊びをした中庭を
黒髪が地名と言うから驚きぬ名字も地名も計り知れない
夏準備しようと思うその矢先急な寒さにセーターを着る
眠いのも体重減るのも持病のせいと納得し素直に従う
たつぷり時間あるのに横になる時間多くて趣味はかどらぬ

春の薔薇王女のように咲き誇りこの気高さを描けるだろうか

倉 浪 ゆ み 埼玉

逝きし子が夢にあらはれ母の日と可愛い花を手渡しくるる
ああ何とガラスに映る我が姿背な丸くなり老婆のやうなり
撤去されし銭湯の煙突どこへ行く旭湯さんの跡形もなく
亡き友の愛した花よ夕化粧面うかべつつ飽かず見てゐる
遠き日に友と眺めた白き花浦和に咲きし白雲木は
柿若葉あめに洗はれ若みどり木下を見れば数多の花おつ
水張田にサギ佇みてその姿水面にうつり墨画の世界

林 美智子☆ 東京

六月はアジサイが咲きバラが咲き枇杷が実りて静かに雨降る
六月の我が誕生石は真珠にて水に生まれる珠こそ好まし
長男が月曜毎にバラ一輪買いかけてくれるも六月の楽しみ
香りあるバラはもたずと家近きちさき花屋にはなかなか並ばず
三週目今日のは香りがしますよとピンクの小ぶりのバラの香ほのか
六月の十日八王子の富士森に大久保長安の顕彰碑建つ
除幕式記念の奏楽の笛の音が細く静かに木々の間をゆく
久々に富士森を歩き思い出す父の日記の中の八王子空襲

松 中 賀 代☆ 高知

昨年の剪定の時季よかったか庭の紫陽花一斉に咲く
弱い足気遣いながら踏みしめる田植え稲刈り頑張れた足
入院の妹の見舞いに急ぎ来ぬありがとうの声弱々しくて
忘れぬ紫陽花の花競い咲く亡き友好みの真白の花
嶺北の木々の緑は萌えたちて車窓に届く一重山吹

本 郷 歌 子☆ 栃木

助手席のシートベルトも付けられぬ臍板断裂の手術後の不自由
右腕を揉むリハビリの激烈さ口を衝いて出る痛い痛い
浮腫とれぬ右手にペンを持たせても力入らず字はぐらついて
順調と医師は告げれど右肩の痛み絶え間なくそっと手を当てる
家事出来ぬ我を支える娘ありて我の幸運を日々噛みしめる
「昨年はきれいな畑でしたよね」荒れた畑を目の前にして
日に三度自宅リハビリを欠かさない六カ月後の回復思いて

村 上 美 江 岩手

七人の認知テストを待ちながら隣の人の靴揺るるを見る
白髪が多き学校いつの間に吾も加はりて知る年齢正直
友人も同級生もこの検査「これからだよ」と様子を聞き来る
街中の制限速度を守りつつスピード上げて走りてみたし
ガソリンを満タンにして「げんかつぎ」テレビは児童の不明を告げる

伊 澤 直 子 ☆ 東京

孫娘中学三年の体育祭応援のリーダー任されており

若きらのリレーの抜きつ抜かれつは応援席も力の入る

東京駅ステーションホテルの見学会ランチ付きにて楽しみに待つ

東京駅ホテルの中はクラシカル落ちついた雰囲気にくつくり歩く

四階の屋根裏の一方はガラス張り明るく広いダイニングルーム

庭に咲く「隅田の花火」額紫陽花水揚げの良し活けて華やぐ

六月の六の付く日に紫陽花を吊るせば魔よけになるとつるす

乾 義 江 ☆ 茨城

早朝よりエンジンの音を響かせて遠く畑にトラクター動く

妹に依頼し届く粒山椒を煮れば厨に強烈な匂い

母の日に送りくれたる嫁御から美味なる魚の焼津糍漬

さ庭べの草を筆れど束の間に芽を覗かせる雑草は強し

長かった夫の介護中を励まされし作家佐藤愛子の訃報に涙す

遠くこの地に義姉の娘の嫁ぎ来てその姪我の縁となりぬ

トランプ程物議を醸す政治家を知らずこの先如何なる世となるらむ

永 光 徳 子 ☆ 東京

梅雨最中あじさいの花とつゆ草と青競い咲く六月の庭

カルガモの静かに浮かぶ川岸の額紫陽花は艶やかに咲く

満開を過ぎたるツツジは梅雨のなか咲きながら重くじつと耐えている

我が家の上を飛び行くハシボソカラスあーヤダヤダと鳴きつつ帰巢す

早朝に町に向かいて飛ぶ時はカーと一声鳴いて行くのに

雨上がりつる草の猛威凄まじくツツジもボケも覆いつくさる

ヨタヨタとつる草抜けば思い出す帰巢のカラスのあの一声を

日々を狭き世界で過ごせども地球は廻る季節も廻る

ローズガーデン 松 本 英 夫 東京

車椅子あごに操る若き人電車を降るるを思はず目守る

見慣れたる店おほく並ぶ光が丘のテナントのビル

段違ひの二つの道路が交錯し問ひつつ向かふローズガーデン

新緑のメタセコイアの陰行けば色彩かをりのローズガーデン

来られざりし友に送ると写真撮る妻に白薔薇アーチを描く

真夏日の強い日差しに叩かれて日陰を探すローズガーデン

七千歩夏を歩いて諦めぬ若葉かをらむ光が丘公園

なほ続く「小さな旅」の郷愁に帰心をさそふ大野雄二氏

大 塚 照 美 兵庫

椿の花いつしか終はりて濃き緑は艶やかさます昨夜の雨に

姑さま刺しにし布巾の糸模様アイロンかくる最後の一枚

介護つづく暮らしの中の数分間やすらぎのありき歩道橋の風

娘と孫買ひて呉れたる四輪のカートははまだ玄関を出でず料理人の孫の作れる麻婆豆腐こん夜は卓にてその手際みつきびきびと着替へのできぬ朝あさのもたつきを見る姿見の中杖と帽子まくら辺に置き眠り待つ躰はすでに闇のま中に介護四の夫につけし家ぬちの手摺りは亡夫の手と思ひゐて

三 好 規 子 福岡

近隣の航空自衛隊基地は西の空を守る司令部滑走路は無く戦争となれば真先にこの基地は敵に狙はれむ思へば恐し施設出で子と玄界灘の大島を臨みひる食ぶりゾート気分に藍色とエメラルド色の遠浅の海の間かうに猫多き相島連休の済みし直後に夫の施設にコロナ感染の幾人いづる不昧公の三大銘菓が娘より母の日とどき食後たのしむアイフォンをマイナカードのリーダーに翳せばすぐ終ふ歯科の受付

須 藤 紀 子 埼玉

かつてなく蜜柑の花の咲き盛り蜜蜂群れて歌ふがごとし遠き日に娘の呉れしミントンのエプロンは今も仕舞ひたるまま蜥蜴啞へ意気揚々と白猫が近頃馴染みの家へと入りゆく有機にて米作る人に田を委ね兄は今後の楽しみ語る

この国に弱者はいらぬと切り捨ての政策進むは誰が幸のため

佐 藤 靖 子 東京

うへ下のことにて林檎の茎のある方が下とは思ひがけなし茄子トマトピーマンジャガイモ使ふけふナス科ばかりと気がつきながら簡単に済ませたる食の洗ひもの随分あるは理不尽にして野辺飾るながみひなげし害あると根こそぎ刈らる可憐に咲くを茄子科には悪なすびあり道みちに咲くをよろこびあるに害とは片方の举措よき猫はわれのみに心ゆるして寝起き共にす本ばかり積みてあひだに眠りある人が起き出づ紙魚のごとくに約束の前日台風収まりて無事会へたるを喜びあひぬ

鈴 木 計 子 東京

金髪に染めたる若き父親が捧げ持つごとと嬰兒を抱く捧げ持つやうに嬰兒抱く若き父に重なるかの日の夫が帰れないふる里思ひ植ゑしといふ全生園の桜も古りつ胸ふたぐ歴史を持ちて咲き続く全生園の桜見上げぬ手を広げやうやく受けたる花びらを手帳にはさむ二枚なれども散り敷ける桜の花びら雨かぜに流線型の色を流せり殺し合ふ撃ち合ひ斬合ひサスペンス躰が拒否す子の事故よりは

石 渡 静 夫 茨城

恋瀬川渡れば常陸総社宮丘の上なる深閑の地に

女坂登れば右手に社殿建つ長い歴史の重さ知らざる
柵の中苔むす平らな石ひとつやマトケルの腰掛の石
境内の湧水流れ行先は禊池なり鳥居立ちたり

関東の灘と呼ばれる石岡に祀られたるや酒造りの神

古民家の十割蕎麦の葭簾涼しき風を招き入れたり

除草剤を蒔いた前の田草枯れて田植いつする六月なのに

二日間留守にしたれば前の田は田植を済ませ風通しの良く

西村邦子 兵庫

入院の義兄のことが気になれど春の石垣旅行を決める

帰り来て義兄を見舞ふ石垣の旅の話は何もせぬまま

西表島ガイドに聞く梅雨入りは鉄砲百合が咲き初むころと

車内にてわれの隣に坐る人ぶどう蔓の籠を撫でをり

全国の特産品の展示会山形ぶどう蔓のバッグが並ぶ

一目見て手にとるバッグのぶどう蔓娘孫へと譲りゆきたし

「テレビでも見ながらバッグを撫でてください」職人さんは手入れを話す

植松千恵子☆ 静岡

鯉のぼり高く揚げれば近隣の人達見に來た過日の思い出

近年の米の高値はどうしてか諸物価値上がりのせいでもなくに

ゴテチアが見事に咲き揃い花期長くアイリス終わり毎日楽しみ

モッコウバラの剪定の枝挿し木にす数年後薔薇の館になりそうな

思い出すバスのボタンを押したがり孫二人で揉め先に押された

サスペンス電子書籍をゆつくりとページをめくる感覚楽し

落書きが喜ばれるのはバンクシー誰が書くのか詮索無用

二年ぶりの茶会

永野雅子☆ 東京

来年は四月に茶会帝釈天と聞けば馴染みの地に笑顔

亡き父も眠る我が家の菩提寺は帝釈天のすぐ裏手にあり

今迄の茶会は五月以降にあり炉点前するは初めての事なり

帝釈天の一番奥の部屋なれば長き廊下がずっと続く

朝一番茶室の準備多々あれど先ずは廊下の雨戸を全開に

薄暗き茶室に差し込む朝の光部屋の印象がらりと変わる

一席目の亭主と聞いて緊張も準備に追われ時は過ぎ行く

川上美智子☆ 高知

検診も今日が最後になりますと閉院告げる歯科の院長

建て替えのビルを立ち退く日の決まり惜しまれつつも閉院となる

四十年通院したる歯科医院の帰り振り向いて看板見上げる

愚痴言えば友の得意なユーモアに切り返されて思わず笑う

シャボン玉の弾けたように愚痴一つ笑って消えて話題が変わる

意識してネガティブワードは口にせぬ友との会話は後味の良し

川 俣 美治子☆ 栃木

廃校のブランコ揺らす風ばかりこどもの声はどこにもなくて
雨上がり蝶が一羽どこから寒かろうとものびやかに舞う
イエスノー右か左か選びつつ歩む人生双六のごと
台風の前は斜めに窓を打つコーヒー冷めて心ざわつく
この頃は心もからだも健やかに日々過ごしたし痛みなくあれ
夕方の空気はほどよく心地良い窓からの風に目を閉じてみる
何しても口から自然にどっこいしょ苦笑いしていつものことと

大 野 茜 神奈川

膝の痛み癒えたる感じ試みに歩数計持ち買物に出る
親友の緊急入院知らせくるラインラインと夜の十時に
丈はまだ五寸ばかりの絹さやの蔓は支柱に風に耐へてる
申告書書きで作り投函すほつとしつつも微かな自信
本屋には終活指南が幾冊もはやり釣られぬ貴き人生
丸々と大きくなりたる甘夏が朝の雨戸を開ければ鈴なり
香り好き沈丁花の苗ひとつ買ふ鉢に植ゑ替へ庭に新客

本 間 志津子 山形

雪融けの水の溢るる白川湖水没林が立ち顯るる
かぐはしき五月の風の街をゆく山王祭りに賑はふ酒田

みちのくへ山王信仰伝へしは近江証人なりしと聞けり
上と下山王二社の神事あり共に始まる祭りとぞ聞く

四百年休むことなく続きたる山王祭りの山車^{だし}今日も行く
農作業一段落の庄内に祭り次つぎ五月が来たる

早苗田に稲穂伸び立ちみちのくは梅雨なる雨期を迎へむとする

益 坂 順 子 福岡

人の仲間と久住連山の深山霧島観賞に発つ
遠征の訓練のため決意する友に付き合ふ三座登頂
濃淡の小さき花は山を染め喚声あがる登山の路に
タラの芽の目に付きたれば摘むことに味を占めたりその味知りて
郭公と時鳥啼く樹林帯こゑを真似つつ山頂めざす
この年も阿蘇高岳を目指したり去年のくるしみ忘却なりて
高岳の標柱撫でて万歳を連呼している遠来の人

梶 尾 栄 子 兵庫

田植ゑ待つ整へられたる水張田は田毎の月を静かにうつす
誘はれてフランス料理の席に居りナイフとフォーク覚束無きに
握力計力のかぎり握れども容赦無き値は低下を示す
掛けて見る事も少なき収集の軸積むばかりの夫でありし
忙しなき声そここに聞こえつつ雲雀は見えず麦熟るる田に

空中を漂ふらしも蜘蛛の糸流れつきたり顔にひとすじ
もの言はぬ一日の果ての風呂に言ふ脳に効くとふ早口ことば

高橋 燿 子☆ 埼玉

幸せは自分で探せと諭したる父を想う娘との会話に
一人ほる馬鈴薯畑は梅雨晴れ間大小コロコロ畝間に並ぶ
落ちてくる鍋を避ければ足元の犬の悲鳴が厨にひびく
犬の背に蛇口の水をかけ続ける混乱し暴れ囀んで抵抗
混乱し震える犬と医院まで日暮れのまちをペダル踏み込む
ぐったりと目だけ動かし老い犬は吾を見据えて注射受ける
容態を案じた夫も安堵する疲れて眠る犬の寝息に

野崎 礼 子☆ 埼玉

左手首のかさぶた取れてむずがゆく反り返る手に力戻れり
グーパーを続けてひと月湯呑み持つ手に戻りたる力たしかむ
段ボールの隙間をぬって玉ねぎの芽伸び続けて居場所広げる
AIをまるごと信じるZ世代親子喧嘩も世間をさわがす
強盗の少年をさし母は言う「そんな子ではない」夜のニュースに
届きたる掃除機その吸引力胸のもやもやさらいゆきたり
新しいもの手にしてまた次を求める心どこまでゆくや
クチナシのブーケ持ちたいという花嫁今年の夏も猛暑の予感

六月号 十首選

冬雷集

須藤 紀子

六月集

中村 哲也

淡淡と残る命を言ふ友のメールにひとつ泣き
顔スタンプ 高橋 説子
ひとしきり散りたる後はしづもりぬ祇園名勝
枝垂れ桜は 天野 克彦
八十年争ひあらずのこの国の危ふさあれど九
条のあり 嶋田 正之
シオニストになりたる人との友情を夫は断ち
たりイースターの朝 プレイクあずさ☆
庭師来てすすき穂刈られたちまちに風の姿を
見失ひたり 田端五百子
椿散る庭土の美よ三種なる椿の下の散りさま
の景 飯塚 澄子
公園に遊ぶ幼な姿なくふらここゆする桜吹
雪は 飯嶋 久子☆
例年に増して値上げの通達のあまりに多く叫
びてみたし 中村 哲也
一塊に王者の如く咲く牡丹吹き来る風に大き
く揺れつ 江藤ひさ子
帰省して戻りゆく子に弁当を持たせて紛らす
この寂しさを 戸部田とくえ

穏やかな縦走続くといふ記憶予想外なる岩稜
の道 益坂 順子
磨りガラスの窓にほんのり桜色うつして紅梅
いま盛りなり 梶尾 栄子
買物のついでに一人さくら見つ「ソロ花見」
といふ新語を思ふ 松居 光子
湾奥の入江の空に舞ふ鳶のこゑ響くなり春の
日の午後 岩村 知康
湯上がりわが足下に猫来たり甲に頬擦りぐ
るぐる回る 羽田 孝輝
隣家より草餅届き餡のせてムラサキハナナ眺
めつつ食ふ 高藤 朱美☆
扇風機は現役のごと回りおり処分場へと向か
う荷台で 藤田 英輔☆
四肢伸べて又縮めては眠る犬浮いた肋と肉球
動く 藤田 英輔☆
夕暮れのカーテンに揺るる花の影人の不在を
かたちづくりぬ 山崎 猛☆
夜更けてもニュースの声は途切れずに窓の外
なる風音やさし 山崎 猛☆

六月号 十首選

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。
支部は昭和49年に長野県支部とし
て設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学
および、近代教育における島木赤
彦の業績の資料保全と、調査研究
を目的としています。
- そのための研究活動として、研究
大会の開催・資料展示会・東京例会・
支部研究会などを行っています。
投稿などの機会が得られます。

●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局

江戸川大学 中島金太郎研究室内
〒270-0198

千葉県流山市駒木四七四
☎ 〇四(七二五二)〇六六一(代表)

六月号 作品一評

小林 芳枝

三月に育苗のカブ小松菜は日中窓辺に夜はコタツ隅に 正田フミエ☆
まだ暖かさの足りない三月に苗を寒さから守るための工夫には子供を育てるような優しさがある。今頃は遅しく育っているのだろう。

うつ伏せになりて右手と左足床から上げる腰痛体操 斉藤トミ子☆

このポーズを試してみたら思いのほかきつくて十秒も持たなかった。そこを続ける頑張りや山歩きを楽しむ原動力になっているようで私も学びたい。

ミラノの緯度を確かめ現地を想像しつつオリンピック観る 浜田はるみ☆

今回の冬季オリンピックはイタリア北部のミラノだった。開催地の緯度を調べて選手達の体感温度を思いながらテレビ観戦をするという姿勢に惹かれる。

「ああいやだ川越の町の変はり様」淋しげに言ふ九十九里の妹 倉浪ゆみ

実家に帰った妹さんの言葉は作者の思いでもあるのだろう。観光客の行き交う街は賑やか過ぎて幼い頃の大事なものが消えてしまったのだろう。

朝食前にデュオリンゴにて英会話を学ぶ中学生レベルならむ 三好規子
お孫さんがスマホに入れてくれたアプリを使って英会話を学ぶという、朝食前のひと時を有効に使って楽しみを見つけられた前向きな姿勢に敬服する。

沈黙の間を演じゐる俳優に「早く」とじてしまふこのごろ 佐藤靖子

この場合の沈黙は台詞では伝えられない深い思いを表現する大切な場面ではないだろうか。それを充分に知りながらせっかちになっっている自分への反省が籠っているようだ。

坂道を登り続ける一時間鷺の声絶えることなし 石渡静夫

鷺の声を聞きながら登る一時間は頭の中がすっきりするような心地好さだったのではないだろうか。結句にそんなことを思わせる余韻がある。

観光地巡りて二万歩寝る前に湿布を貼るぬ娘に言はずに 西村邦子
娘さんとの二人旅を楽しみながら歩いた二万歩、疲れを知られないようにそつと手当をして明日に備える。結句に母としての思いが籠る。

一万歩春には歩くと決めたれどなお動かざるわが身なりけり 川俣美治子☆
少し暖かくなったら歩こうと決めた一万歩を実行することができないという。ハードルを下げてみることも一つであるが習慣として身に付けるのは容易なことではないと思う、頑張っしてほしい。

分担の朝の仕事の片づけて一休みと言ひ熱き珈琲 大野 茜

朝毎の家事を分け合っているのだろう。落ち着いた所で飲むお二人のコーヒーが如何にも美味しそうに香る。

包丁を使えぬ暮らし続くなか電子レンジのありがたきかな 野崎礼子☆

思いがけない腕の骨折で電子レンジの機能を実感する。野菜等の処理も助かったのではないだろうか。お大事に。

六月号 作品一評

藤田 夏見

夕空の紺はかぐろき夜に入りて沈み鎮まる三月もすゑ 大山敏夫

稜線の明るみが消えて晴れていた昼の空も夜に入ると沈み、鎮まるのだ。三月の末のかぐろき夜は桜に浮かれた日のことだろうか。

仏の座レンゲの花と間違うなり群れ咲く様を描く人あり 斉藤トミ子☆

田んぼの緑肥として植えられていた蓮華草を減多に見ることはなくなつた。一面に広がる仏の座のピンクは蓮華草と間違う程に遠目には紛らわしいのだ。それを描く人を見る作者はやはり仏の座とレンゲを見間違えたと歌う。

一筋の煌めく道の現われる朝日昇り来る淡海の湖に 本郷歌子☆

ホテルの高層階から対岸の家並みにのぼりゆく朝日を見やれば、まだ薄暗い琵琶湖の水面に一筋の光の道の煌めきを見つけた。広がる湖水の静かな夜明けか。

下落合神田川の桜並木小滝橋までゆつくり歩く 伊澤直子☆

土地鑑のある人にはその土地の情景が臉に浮かぶだろう。桜並木を楽しみながら歩いてる作者。

夕暮れのチャイムの音にムクドリは弧を描きつつ薔に向かう 永光徳子☆

ムクドリの大群。人にもたらず都会での問題は色々言われている。が、ただその生きているムクドリの状況を詠まれた。

濃く淡く紅染むる花びらの重なる様はダンスのドレス 齋鹿ミヤコ

透き通るような花びらの重なりですね。家々を掠め飛びゆく戦闘機基地ある街の日常の異常 須藤紀子

家々を掠めるように飛んでゆくのは戦闘機。これは作者の日常なのだろうか。

基地とは米軍基地の事だろう。日常の異常に、声を上げ続ける国民でありたい。

緊急にあらざる選挙を厳寒に為さむ権力追ひたき節分 鈴木計子

比較的温暖な生活圏に暮らす筆者も、この真冬日の続く頃の選挙に何か物申し

たい気持ちになりました。作者はもののけの仕業ならば豆まきを思われている。

観光地巡りて二万歩寝る前に湿布を貼るぬ娘に言はずに 西村邦子

一日二万歩とは結構な歩数ですね。娘から元気な母親認定されているのだろう。内緒で貼って済ませることの出来る体力に私は賞賛。

引き潮で岩の島まで歩けると時間が合えば見たし伊豆の海 植松千恵子☆

旅の予定にはなく旅の途中で得た情報に心を動かされたか。素直な思いをそのまま歌にされた。共感の一首。

折れし骨ぐいぐいと戻す医師の手にお産より痛いとは我は叫べり 野崎礼子☆

これは辛い。痛い。医師の手が目の前にダイレクトに見えるようだ。お産より痛いの直接的表現。叫べりの結句に同調。

包丁を使えぬ暮らし続くなか電子レンジのありがたきかな 野崎礼子☆

不自由な暮らしに電子レンジに助けられて本当に良かった。少しでも早い回復を願わずにおれません。

八月集

山崎 猛☆ 埼玉

原稿の締切近づき焦りおりチャイムの音にも心乱れて
EV車が世に出たるのちに船もまた進水式へと静かに進む
武器否定原発否定の為政者も世情変わればすべて肯定す
温暖化地球の姿を変えゆきて台風1号春より生まる
遠き日の諏訪湖の水は蒼く澄み冷たき風に波白かりき
上諏訪より下諏訪に向かう車窓には白樺の木々遠き春待つ
ドローン飛び熊の行方を追う里に休校の子らの安否気遣う
海外に本拠を置ける詐欺師らが弱き人らの資産を狙う
住人なき家の梅の木は大きくて隣の屋根に水仙ひそと咲く

佐藤 幸子 山形

蕨採りも一大行事帰省したる子ら引き連れて俄か隊長
ありがたうの言葉残して子ら去りて耕運の音軽やかに響く
朝ドラのメロディーのなか新聞読む猫舌の夫へぬるき一服
大蒜に追加の液肥を撒かむとしてAIに問へば「既に遅し」と

白苺熟れたりといふ友の畑に二つほど食み人生語る

のりたけとジョージの朝のラジオトーク声聞くだけで心が晴れる
芍薬の紅き蕾の膨らみて杭打ち五本大きく囲ふ

田植ゑ終へて清しき今朝の深呼吸ほのぼのとして六月朔日

東 ミチ 青森

肉親の誰もが知らぬ齢を生き夢より醒めてただただ淋し
椿ちる忙しなく散るを掃きよせるノラ猫入り来て手足を伸ばす
賜ひたる『陽だまりの庭』の戦争編に八歳たりし吾に多く重なる
猫の暮らす風除室の花替へる庭のシャクヤク見事に咲きて
風除室のダンボール箱の猫の家に素性と呼び名の表札さげる
大雪に折られたる庭の朴の木が大葉広げて元気を呉れる

安川 敏子☆ 埼玉

むらさきの矢車草が群生し隣に多色の立葵咲く
梅雨に入り白紫陽花が知らぬ間に庭の片隅でひっそりと咲く
暑い日は水羊羹に熱い茶を飲みて爽やか風通りゆく
台風に備え雨戸を引き出せどビクとも動かずあきらめる
待望のアガパンサスの蕾出て今年も楽しむマウイ島の景色
懐かしい撮影旅行の上高地笑顔の写真あの日の仲間
雨つづき頭痛腰痛ぼやけ顔痛みに無縁な十葉の花

山 本 述 子 神奈川

木陰でのラウンド毎の小休止汗沈まりて話の弾む(グランドゴルフ)
家の庭のダリア数本命日に持ち来て呉る息子知人
雨上がり満開の紫陽花一段と色濃くなりて輝くばかり
梅干しを今年も漬けて一安心仕上がるまでは気がかりなれど
螢らは日暮れとともに水辺から林の奥から飛び初めをり
日の落ちて螢生き生き数を増し光の中に吸ひ込まれさう

松 崎 みき子 岩手

二年前の山林火災の復興かける漁師の意気込み祭りに現る
勇壮な権現太鼓の若者は海を前にして大きく腕上ぐ
雨雲が雷連れくる西の窓部屋の中では焼菓子膨らむ
畑に居て沸々と出る汗拭ふ玉ねぎ五百収穫の時期
今日もまた熊出没の話あり船着き場には海泳ぎしと

塚 本 節 子☆ 茨城

君子欄マイナス八度に耐えきれず葉をしぼませる一月末に
葉の枯れて花芽も見えぬ君子欄咲く日を信じ水やりをする
君子欄の茎のあわいにひとつだけつぼみ見つける四月の朝に
一斉に田の水張られたる夕ぐれに蛙の声の遠くに聴こゆ
蛙鳴く声聴く度に思い出す田植えに追われし彼の日のくらし

米つくり委託にしたるは五年前夫の病みし蛙鳴くころ
田の水の張らるる畔の真ん中を白鷺一羽ゆつくり歩く

井 出 裕 子 静岡

今日もまた「歩いてゐますか」医師の言ふ「何とか」と答ふ曖昧にして
「骨密度上がつてゐますよ」医師は言ふ結果の表から眼移して
骨密度良好なるはスーパ―を一つ遠くに変へたるゆゑか
往きよりも足取り軽く医院退く道の石ころ蹴りたき気分
帰国する日本語クラスのアナさんに富士山模様のカップを贈る
来日して二年のアナさん笑みて言ふ「日本語好きおにぎりもつと好き」
英国から一人娘を送り出したる親の思ひに心めぐらす

羽 田 孝 輝 山形

昨日まで夕には小屋に戻りたる鶏今日は戻ることなし
最後まで飼ひ続けたる鶏一羽暗くなれども小屋に戻らず
借りて来た猫そのままに二匹とも診察台で身動きもせず
草むらに潜む蝮を殺生し機械下ろして合掌する朝
仏間には姉持ち来たる芍薬あり蟻に気づかれず香りを放つ
薄暗き杉の木立のその先に朝日を返す若葉眩しき
事故に遭ひ障害に伏す友見舞ひ五十年の長きを思ふ
呆け防止に麻雀始むる古稀の春不健全だと避けしを悔やむ

六月号 六月集評

鈴木 やよい

緩木山の頂に立ち標識を両手に撫でて
越敷岳に発つ 益坂順子

祖母山の見ゆる峠に休むとき疲れ忘る
るアケボノツツジ 同

九州の祖母山に連なる緩木山と越敷岳
を周回するルートのようだ。行ったこと
はないが、ネットを見ながら巡るのも楽
しい。緩木山の山頂で標識を撫でる気持
を共有したような気になる。

こは怖と「真実の口」に手を入れしを
投函する度思ふ彼の旅 梶尾栄子

「真実の口」はイタリアのローマにあ
る石の彫刻。嘘つきが手を入れると手を
噛み切られるとか。投函するという動作
で、その時の感覚が蘇る。今も心に残る
旅なのだろう。

若き頃地味に思ひみし鼈甲は今うす黄
色のベストに相応ふ 松居光子

地味だと思っていた鼈甲も今は似合っ
ている。同じような経験は筆者にもある。

年齢を重ねていけば、それなりの変化が
ある。うす黄色のベストに合わせた鼈甲、
ステキだと思う。

対馬より苗木持ち来しわが庭の玄海つ
つじ花を咲かせる 岩村知康

玄海つつじは玄界灘周辺に分布してい
て、対馬は最大の群生地だそう。作者
の庭に咲く玄海つつじは対馬より苗木を
持ってきたもの。思い入れのあるつつじ
なのだろう。

雪残る泥田に群れる白鳥はみな黙黙と
旅に備へをり 羽田孝輝

雪解けの泥田に白鳥が群れている。旅
に備えて餌をついばんでいるのだろう。
「みな黙黙と」に、北へ飛び立つ前の緊
張感が感じられる。これからの旅を思い
やりながら、作者は優しい目で白鳥を見
つめている。

玄関に満作一枝壺に立て気持ち浮き立
つ春のはじめに 同

早春に他に先駆けて咲くマンサク。そ
の一枝を玄関の壺に活ける。待ちかねた
春だ。「立て」と「立つ」が重なり、気

持の昂揚が感じられる。

隣家より草餅屈き館のせてムラサキハ
ナナ眺めつつ食ふ 高藤朱美

ムラサキハナナは黄色の菜の花と姿は
そっくりだが、青紫の花が咲く。この花
を眺めながら、頂いた草餅をゆったり食
べている。草餅の緑とムラサキハナナの
青紫が清々しい。

ローカルの気象予報士は転勤し四月を
迎えキー局に出る 藤田英輔

いつもローカル局で見いていた気象予報
士なのだろう。キー局に出ていることに
気付いた。四月は人事異動や転勤が多い
時期だ。身近な人が栄転したような気持
ちになっているのかもしれない。

春くれば桜は変わらず咲きにけり娘の
忌日を風は寄せ来る 山崎 猛

咲き満ちてなお足りぬものある春よ娘
ひとりの不在に触れる 同

春がきて、また桜が咲いた。どんなに
桜が美しく咲いても、何かが足りない。
娘さんを亡くされた心の空白は埋めるこ
とができない。胸がつまる。

六月号 十首選

作品一 石渡 静夫

幹若きこのさくらには花のとき来てひらくに
もはぢらひの見ゆ 大山 敏夫

梅見物腰が上がらずそんな時梅写真メール届
きて嬉し 浜田はるみ

満たせない吾の頭の中にある「出来ない事」
の増え来たること 村上 美江

沈黙の間を演じいる俳優に「早く」とじれて
しまふこのごろ 佐藤 靖子

濃く淡く紅染むる花びらの重なる様はダンス
のドレス 齋鹿ミヤコ

久しぶり畑の様子を見に行けは豆の新芽は鳥
に食われけり 植松千恵子

土手に咲く菜の花映し黄に染まる川面照らし
て春の陽眩し 川上美智子

桜草あふるるほどに咲き満ちて道にこぼるる
主なき家 川俣美治子

鬼はそと闇夜に向けて豆を撒くもはや信じる
人はなけれど 大野 茜

大空を北へとよぎる鳥の影点となるまで見送
りゐたり 本間志津子

作品二 大塚 亮子

年越しに活けし花なり葉ボタンの二度目の茎
に蕾ふくらむ 東 ミチ

亡き母の唄ひし「桜井の決別」けふ唐突に口
衝きて出づ 佐藤 幸子

つれあいの春の彼岸に悠君と二人して行く花
と線香持ちて 加藤 富子

墓前にて供へのケーキ分けて食み昔を語る彼
岸中目 奥山 清子

伝説のキツネどこかにいるようににぎわう春
の女化神社 小嶋 知葉

月山を遠くに仰ぎ春耕の雨後の畑に春菜を蒔
けり 水澤タカ子

窓際の楓の葉群色の濃く日毎伸び行く夏に向
かひて 野口 秀子

みどり児を代わる代わるに撫でながら小さな
姉妹の頬のあからむ 塚本 節子

雛祭りとは皆既月食重なりて窓を開ければしん
しんと雪 井上 鈴子

春彼岸ばた餅供へる仏壇に線香匂ひ日ざしゆ
るやか 松崎みき子

作品三 天野 克彦

明るいぞどこか怪しい妻の声油断できない何
か企む 新井 光雄

「歌集『渚』鑑賞」を読み終えて著者の深掘
り心に残る 後藤 恭介

住み着いて十年になるトラちゃん居眠りし
つつ春を過ごしぬ 越澤 太朗

電子音あちこち飛び交ふ朝餉時間き分けて動
く妻は超人 長谷川 剛

やはらかき風に吹かれて墓参り冬の汚れを流
して洗ふ 長澤千恵子

花苗の色とりどりに並びあてスーパ―前は
ガーデンのやう 今野 澄子

夕餉どきの春雷停電三時間ろうそくの灯の懐
かしき夜 松田 忠一

薪燃える匂ひ漂ふ朝の道歩いて五分のポスト
に向かふ 児珠 純子

去年よりも少し早いと軒下のつばめを眺める
三月末日 河原木光子

前の日に指で音頭を取った母思わなかったよ
亡くなるなんて 鈴木 知子

六月号 作品二評

井上 菅子

甕に挿す桜の枝の芽吹き見て我の心が少し前むく 東 ミチ

甕に挿す桜は、花も終りの頃稚い緑の葉芽が出てくる。室内に在っても、順次成長してくる生命力の強さに、元氣をもらった思いを結句に詠む。

早咲きの桜満開の病院を囲みて連翹・雪柳咲く 卯嶋貴子☆

病院イコール病氣であり、暗いイメージだが、そこを取り巻く春の花々で明るいイメージに変わった。

過去は消え今だけ見つみ微笑みて施設に生きる従兄の妻は 藤田夏見☆

認知症のような病氣なのだろう。「微笑みて」に病氣を認識していないことを詠み、周囲の戸惑いや憂いが伝わる。

藤棚に開花の兆し見え初めて桜に代り花房垂る 山本述子

春から初夏へ、季節の移ろいを二つの花で表した。桜はさくら色、藤は紫、色

彩が日本の豊かな四季を表し美しい。

寺領に咲く桜を囲み「そばの会」若い仲間誘われ興ず 児玉孝子☆

「寺領」が良い。寺領も開放し、地域の人の憩いの場に供する。「そばの会」だから、花の下でそばを食べたのか、など場面の想像が大きく膨らむ。

妹家族と待ちあわせた墓参り母逝きて十五年過ぐ 加藤富子☆

「母逝きて十五年過ぐ」、十五年は長い短いか、それぞれの思いに墓参は行われたことだろう。妹家族との絆を詠む。

亡き友と訪ねしガマの湯名を替へて建て替へて今日閉館となる 奥山清子

ガマの湯が名を替えた理由は、経営者が変わったのか、経営不振で一新を試みたか。その上建て替えまでして閉館となった。温泉旅館の経営の困難さに注視。

種まけば自づと芽の出で背を押さる数を減らして今年もやれる 水澤タカ子
種をまけば強い生命力で自然に芽が出てくれる。野菜さえもこの力強さ、負けてはいられないと老齢に奮い立つ作者。

近頃は友との会話に断捨離の遅々と進まぬをこぼすこと多し 井出裕子

断捨離は決心をしていざ始めても、思いつく出のある服や物など、つい立ち止まって手が止まる。そういう気持がわかってくれる友なのだろう。共感できる日常詠。

雛祭りとは皆既月食重なりて窓を開ければしんと雪 井上鈴子

雪国は雛祭りの季節になってもまだ雪が降る。皆既月食を見ようと窓を開ければ、雪がしんと降っていた。しんと降るに、一つの諦念が込められる。

この角で歩をゆるませて深呼吸吸沈丁花の香り今が最高 安川敏子☆

ウォーキングの様子だろう。一息つきたいところに沈丁花が咲いていて、「歩をゆるませて深呼吸吸」に実感がある。

寄り道して花見しますと言つてみる桜並木が美し過ぎて 松崎みき子

「寄り道して花見します」と言わせるほど美しい桜並木。天候も時分も最高のときに差し掛かったのだろう。独り言が親近感を表し、柔らかな風景が目につく。

六月号 作品二評

江波戸 愛子

月一度のペースにて書きほそぼそと続けて来たり「広報手帳」 桜井美保子

「広報手帳」は2009年に始まり今も続いている。短歌にかかわる地を訪れ、先人の歌や懐かしい会員の歌もあり楽しみながら学ばせていただいている。会員のみならず楽しみにしている方も沢山いらっしゃるのではないだろうか。

豪雪に折られ散らばる桜の枝を咲かせてみた水張る 東 ミチ

甕に挿す桜の枝の芽吹き見て我の心が少し前むく 東 ミチ

降雪の多い地にお住いの作者のやさしさと春を待ち望んでいることがよく伝わり、二首目の下句に共感を覚える。

十年以上夫の通う杏林病院車椅子押す吾は初めて 卯嶋貴子☆

一人で病院に通っていたご主人が車椅子を必要とすることになり、その病院へ初めて車椅子のご主人と電車に乗って通

うことになった作者の安堵感が伝わる。

薪ストーブの前で籠編む夫の背此処がいちばん落ち着くさうな 佐藤幸子

長い間この場所で籠を編んできたのだろう、ご主人を見守る眼差しが優しい。

過去は消え今だけ見つみ微笑みて施設に生きる従兄の妻は 藤田夏見☆

認知症を患う従兄の家族を思い手を差し伸べる作者の優しさに胸が熱くなってくる。認知症に罹った家族と暮らした日々を思い出しながら一連の歌を読ませていただいた。

キンカンの下に生えたる白百合の新芽のびのび花咲くを待つ 早乙女イチ☆

のびのびの表現に白百合がすすくと伸びて膨らんできた杏を嬉しそうに見ている作者の笑顔がみえるようだ。

つれあいが十九年勤めし佐野高校二人の孫は今日入学式 加藤富子☆

お孫さん二人が入学する高校は嘗てご主人が教壇に立っていた学校で二人のお孫さんの入学式を見ることの出来ないご主人への想いが優しい。

息子の車右に折れたる後を追ひ手を振りてをり今度いつ来る 奥山清子

お一人で暮らしているのだろう、結句に息子さんを見送る寂しさがよく判る。

種まけば自づと芽の出で背を押さる数を減らして今年もやれる 水澤タカ子

息子さんの反対を押して切つてまいた畑に春菜が芽を出した、結句の今年もやれるに畑仕事を続ける喜びが伝わる。

川面へとこぼれて流るる花びらを車をとめてしばし眺めぬ 塚本節子☆

桜の花びらの散る美しさを詠みその花びらが川面をうめて流れていく美しさに車を停めて見入る作者の感動が伝わってくる。

この角で歩をゆるませて深呼吸吸沈丁花の香り今が最高 安川敏子☆

沈丁花は日本の三大香木の一つでありその花の香を充分に楽しむ喜びを詠む。

糠漬けの程良く漬かり安堵して愛しみながら撫でてかき混ぜる 首藤文江☆
作者の糠漬けが美味しいのは作者の愛しみと撫でてかき混ぜる行為にある。

作品二

大山 敏 夫 埼玉

大友柳太朗「加賀騒動」にて復活し地元民は讃ふ大槻伝蔵を
「加賀騒動」好評を機に生まれたる「碧空会」は柳太朗後援の会
挨拶文に「愚鈍愚鈍」を繰返し大友柳太朗は不思議な男
歌集『柳』は大友柳太朗後援会初の仕事かその歌集は何処
伊達騒動の原田甲斐も静かに演じたる柳太朗を支へしか後援会は
「大地の侍」いま北海道にて見直さる開拓の史実と柳太朗の演技
女性天皇の是か非かを論じ否定派の優位なり時代劇お家騒動めきて
女性天皇支持して雄弁なる一人ときをり会へばわが妻などは
この問題国民投票にて決めるより収拾つかなくなる時を待たむか

岩 村 知 康 長崎

わが行かむ田原の里は多良岳の中腹ぞいま目に展けたり
朝明より耕耘機の音ひびかせて田を掻く人のそこかしこ見ゆ
機械化の進む農にて稲植うる重労働の軽くなりたり
牛を使ひ父が水田を掻きをりし遠き故郷のわが記憶にて

苗箱に青々とある幼苗を乗せて田植ゑの機械は動く

うち並び人が早苗を手持ちて田植ゑしたるは遠き昔ぞ
田植機の植ゑもらす跡おぎなひて苗手植ゑする女の在りぬ
早苗植ゑ人影見えぬ濁り田にはや白鷺の舞ひ降りてあり
有線放送で大早苗饗おほさなぶりを触れ告ぐる梅雨の晴れ間の農の休日

藤 田 夏 見 ☆ 広島

谷底と山肌見つつ木漏れ日のトンネル走れば猿木渡りす

笹百合の芽吹きを採す笹山に蕨を摘めば両手に余る

荒草と共に刈る落葉を落とし選り分けおりぬ鹿も居る山

けもの道ある山に咲く笹百合に会いにゆかんか地下足袋履いて

この山のマダニのうわさ猪の領域なればわれ侵入者

けもの道笹かき分ける猪も蕾見たるか笹百合四本

笹百合の種を蒔こうと言ひ合いて六年目の花麓より見る

さみどりの揺蕩う中の笹百合の動画送りぬこの山の主へ

藤 田 英 輔 ☆ 高知

甘とうの収穫始め株は未だ腰の高さでB級多く

梅雨入りの頃に始まる収穫は猛暑を越して紅葉するまで

赤い実は歩道に落ちて塵となる啄む鳥を待ちくたびれて

扇風機は首を回して風送る老犬の背の鼓動のリズムで

シャボン玉は風に流され連なりて近づき過ぎて割れてしまった
三歳児のお八つの好み変わりゆく甘さを知って硬さを知って
診察の帰りの道にアイス買い家に着く頃食べ頃になる

早乙女 イ ☆ 栃木

ミカン生る青葉の中にまるまると大豆ぐらいの大きさとなる
今年またミカンたくさん食べられるうれしくなつて毎朝見てる
ミカンの木の下に白ゆりさわやかに花を咲かせてうれしい朝だ

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

宇都宮で親と離れたという雄の熊我が市内の人々の中で捕獲さる
渇水で水の涸れたる湖を満たしてほしい今日降る雨に

津 田 美知子 岩手

そよそよと吹きくる風の心地良く南部風鈴の短冊揺らす
茎細き二寸足らずの丈にして一輪咲かす五月のコスモス
もも色の花一輪咲かせゐて季節先取る五月のコスモス
そちここに囀る鳥の名は知らず透き通る声に白ツツジの花
杖をつきチームのバスを見送る子駅の広場に一人ポツンと
停めてある車のミラーに写る鳥自分の姿を幾度も突く
離れ行く台風の威力残りゐて荒れ狂ふ波に後退りする
夕暮れの群青色の岩手山残雪まとふ岩手の誉れ

加 藤 富 子 ☆ 栃木

誕生日に摘みたて苺届けらるジャムを作りて裾分けをする
苺ジャム予想以上の出来映えに一人満足す朝のキッチン
娘宅へ苺届ける誕生日四人並びておめでとうの声
おめでとうと言祝ぎくれる人のいて七十四歳の生日に感謝す
亮君の合格祝いの旅先でフリマに走る娘と我は
フリマでの出会いは運の為せる技絰模様のバッグ見つける
株分けをしたる紫陽花それぞれに蕾を持ちて楽しみの日々

松 居 光 子 三重

植物の名をスマートフォンで調べ得るを知りてより図鑑を見ることなし
スマホにて知りたるレースフラワーはふんはり白く涼しげな花
目に止まる珍しい花をケータイで写真を撮るが楽しみとなる
最寄り駅のプラットホームに青と白のツートンカラーの電車近づく
新型の車両は明るく美しく四日市まで快適に行く

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

大学を卒業したと男孫くる都心に住みて建築会社
就職の決まる男孫に九十五歳祝ひの心渡すは嬉し
こどもの日に曾孫の家の新居成り祝ひに昼のバーベキューする
草ばかり生えくる畑も見過ごせず涼しくなるを待ちて取りにいく

寺庭に大きく開く泰山木樹下に立てば仄かに香る
手作りの水羊羹に抹茶飲む涼しき風に独りを樂しむ
曾孫の二歳は日本語話しくる暮しのなかで覚える不思議
スカシユリ丈高き鉢に赤と白日ごとに開き庭の華やぐ

小嶋 知 葉 ☆ 茨城

栗の花青空に映えびつしりと帰国の娘は花粉を嫌う
栗の花ベージュ色からうす茶へと変りて静かに地面に落ちる
突然に電気温水器壊れたり依頼すれども一ヶ月あとと
深く掘りて温泉が出たという「湯舞音」に二時間旅心地なり
若者とAIのこと語りあう「情報入れれば短歌も作る」と
情報の高さがAIを育てるが「鵜呑みにしない」のことはホッとす
遠き日の全文書写や地図作りわが内の誇り口にはせぬが
友のくれしあさがおの苗二十本帰国の孫と鉢に移植す

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

昨日まで炬燵で脚を温めいて今日は扇風機急ぎ出したる
足場取れすつきり変りたる我が家を写メールにして子等に送りぬ
四本のゴーヤに網を二枚張るカメムシ来るを気にかけてながら
山々に囲まれて咲くバラの園「イバラキフラワーパーク」へ友と
華やかな色とりどりのバラ達は歓声浴びて別世界造る

幹太く枝広がりて小ぶりなる我が家のバラの育ち気になる
友からの青梅二キロ届きたり梅ジュース作る時間楽しや
小さな花卉重なり房長しカシワバアジサイ水無月に入る

立 石 節 子 ☆ 東京

ソプラノと琴ピオラがコラボして活力漲る静かな中に
ピオラの音静かに始まる浜辺の歌よ琴の音が入りソプラノ入りて
春の海琴とピオラが響き合い心の底まで通るひととき

時差の為食欲無くし果実のみ食べるフィンランドからの短期留学生

水 澤 タカ子 山形

ひなげしの苔のすべて垂れをれど咲けば上向くその細莖に
雪解け待ち蒔きし豌豆いま盛り日毎母さん取りてくれをり
茂吉短歌全国のつどひの弁当は斎藤紀一の庭の筍
あどけなき少年茂吉と紀一氏の並ぶ写真に親しみ涌き出づ
京都より来たりて語る永田和宏氏の記念歌集の講評聴きぬ
全国の集ひの後の余韻あり吾が友そろひ茶を飲み語らふ
胃の検診に背中ぐるぐる回されて痛さ残りて老いの身歎く

野 口 秀 子 山形

黄花ノコギリソウつややかに咲きいただきし近所の小母さま思ひ浮かべる
小母さまに貰ひて育てた花咲きぬ写メール一枚持ちて訪ねむ

世界遺産多きスリランカにはサファイアとルビーのとれる宝石島あるといふ

金雀枝の花は黄色に色付きてたわわに増え行く五月の雨に

金雀枝の黄色に咲ける莖あまた手折りて部屋に飾り香し

高野槇のほつほつ芽吹く雨の朝三角錐は尖り伸び行く

海仁くん誕生日です四歳よポケモンのパジャマ岩手に送る

緑一面に白き花咲く夏来たり三葉のクローバー白詰草の

奥山清子 山形

ことんと新聞配る音のして出づれば夜明け朧月浮く

舗装路のあるかなきかの透き間より根強く咲ける堇いとほし

庭の辺の岩藤の芽の萌え出でぬ老を忘るるその若みどり

娘より「五加木ありがたう」の電話くるうこぎ飯食む母の日の朝

藜摘み朝餉の一品胡麻みそ合へ懐かしき味一人楽しむ

『夢の如くにて御座候』題に惹かれて読みつぎぬ斎藤茂吉と永井ふさ子の

磨ぎ汁で朝採りの蒔茹で上げる夫が庭に植ゑし路なり

井上鈴子 山形

路地の先も白つつじ咲く長井の町今年も夫と初夏を巡りぬ

ぜんまい採り今季はやめると言ふ息子「熊の被害のニュースに出るな」

水張田の中の青空に小鳥飛ぶ西山の方へどこまでも飛ぶ

透析の始まる前に行かむとす夫と出会ひし山形の街

兄の孫を誘ひて食ぶる焼肉はこれが最後と密かに思ふ

玉砂利の墓地に生ふる草引き抜きて夫の入院義父母に告ぐる

初めての透析の夫と別れきてヒーター点ける寒くなけれど

癌の友を見舞ひて帰る車窓より飯豊連峰の残雪滲む

首藤文江☆ 埼玉

あの時のカフェめざして足早にひたすら歩く雑踏の中

あの時の津波の凄まじさを思い出す震災遺構の荒浜小に

あのカフェはまだあるかと探し歩く杜の都の青葉通りを

見頃なる豪華絢爛バラの花カメラを向ける古河庭園

左足まだ治らぬと薬飲み溜息の出る花曇りの朝

待ちわびた佐々木投手の二勝目に涙がにじむ帰宅への道

金子 八重子☆ 千葉

この夏は日焼け遮る長袖を着る人多し駅のホームに

同僚は仕事が速いとおだてられやり残せない意地を見せたり

「笑点」のテーマソングを聞く夕べ職場の腹立ち小さくなりゆく

転がったボールペンを足指で掴めば足裏これでもかとする

明細の二重請求指摘すればカード処理時の不手際詫び来る

一分の片足立ちを一年間続けてふらつき今はほぼ無し

メントールのど飴ひとつスーパールの棚に残れり我を待ちてか

六月号 作品三評

山本
三男

ラーメンをツマミに昼酒ハイボール外聞なしに町の中へ 新井光雄☆

ハイボールも飲める中華料理の店なのでしよう。気の向くままに飲食をしている様子がよく出ている作品です。「外聞なしに」という表現はどことなく外聞を気にしているような印象を受けました。

住み着いて十年になるトラちゃんは居眠りしつつ春を過ごしぬ 越澤太郎☆

トラちゃんと言うのは住みついた猫に付けた名前だと思われれます。春眠曉を覚えずという言葉がありますが、春に眠くなるのは人間だけではないようです。ほのぼのとした気分になる歌です。

降る雪は車のライトに浮き出でて静けき山野を銀色に染む 長谷川 剛

雪の降る夜の山野の幻想的な光景を表現した見事な一首です。車のライトに照らされて見える雪が、音もなく山野に降り続いています。車のライトで降る雪を

捉えているのが斬新です。

花苗の色とりどりに並びあてスーパ前はガーデンのやう 今野澄子

普段よく行くスーパーで、突然色とりどりの花苗が並んでいる光景を目にするのと、急に季節が変わったように感じるものです。この作品では人為的ともいえる季節の変化を巧みに捉えています。

十二人の手術予定の一番と呼ばれてたちまち緊張の増す 河原木光子☆

手術を前にした作者の緊張感が伝わってくる作品です。十二人も手術予定者がいて自分が一番に呼ばれるなんて、という気持ちなのでしょう。白内障の手術に関する歌が続きますが、いずれも引付けられる作品が並んでいます。

ペランダに干したシャツの乾きよし取り込む布団も太陽の匂い 鈴木裕子☆

明るい気分がよく出ている作品だと思います。太陽の匂いという表現は天日干した布団から出る匂いをよく表わしています。日常の生活の中で感じた喜びをすくい上げた一首です。人間の五感の内

の蝕覚と嗅覚が活かされており、それが読者の共感を呼びます。

信号の量けて薄くなりてより白内障は友達となる 塩野 伸

友達という言葉を使つて白内障との関係を表わしています。白内障は高齢になると避けられない病気のようです。自覚症状があるようですが、今後も付き合つていこうという思いが伝わります。

「城はない城址はある」と応えたる桜祭りの屋台の店主 倉田ひろみ☆

桜祭りの賑わいを感じられる作品です。桜の名所の場所はまだ先にあり、それを尋ねたのでしょうか。屋台の店主の軽妙な軽口も、桜祭りの浮かれた気分を感じました。

早朝の神社の白砂清められ踏み込めぬ程凜と鎮まる 鈴木知子☆

神社の白砂の模様の清々しさが目に浮かんでくるような作品です。早朝なので、まだ歩いた人もないのでしょう。白砂の敷かれた境内の、侵し難いような雰囲気を感じられます。

六月号 作品三評

橘
美千代

トーストを口に啜えてあほ面でガザを
見ている無意味な同情 新井光雄☆

自嘲的でネガティブな言葉が並ぶに驚かされる。裡にこもる作者の怒りとフラストレーションの成せるわざであろう。ガザの惨状に対し何もできない助けられない苛立ち。ニュース画面を見ている人々の多くがそうであるとも。

降る雪は車のライトに浮き出でて静けき山野を銀色に染む 長谷川 剛

雪の降りしきる夜に車のヘッドライトに照らし出される雪には筆者も心惹かれる。無音の界に煌めきながら絶え間なく降りくる雪に永遠を感じて。山野が雪にけぶり銀色の景になると。

庭の角の路のたうは春の味そつともらひて路味増作る 長澤千恵子

春の自然の恵みの贈り物とも言える路のとう。庭の片隅に見出した作者は春の訪れを実感し喜びに満たされる。「そつ

ともらひて」に自然に感謝し尊ぶ作者の謙虚な姿が現れている。

花苗の色とりどりに並びあてスーパ前はガーデンのやう 今野澄子

春いつせいに花々が咲き出す。梅、桜、モクレン、連翹と続き次つぎと色彩が溢れてくる。スーパーやホームセンターの園芸売り場は色とりどりに華やいで。「ガーデンのやう」はまさにその通り。見ているだけで楽しくなる。

夕餉どきの春雷停電三時間ろうそくの灯の懐かしき夜 松田忠一☆

春の嵐により停電し蝋燭の灯のもとに集まって過ごした三時間。LEDなどの人工の灯と違ってぬくもりのある蝋燭の明かり。懐かしくて何かホッとする。

有事無き平安な国なればこそスイッチひとつで温もれる朝 児珠純子

ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルのガザ空爆と砲撃、イラン・イスラエルの紛争にイランによるホルムズ海峡封鎖。戦争があちこちに勃発し平和な日常を失った人々が増え続ける。平穏な日

本にいてほつとすると共にどこか後ろめたさを感じている作者。一抹の不安も。眼帯を外したとたんにクリアーのスプレーひと吹きしたごとく見える

白内障の手術後は視界が劇的に変わると聞く。曇りガラスから透明ガラスに変わったかのようにクリアに。そんな作者の驚きが下の句のユニークな表現によりストレートに伝わってくる。

ペランダに干したシャツの乾きよし取り込む布団も太陽の匂い 鈴木裕子☆

春が来て気候が良くなり日差しが暖かく降り注ぐ。洗濯物の乾きもよく布団にも日の匂いがしみ込んで。本当に心地よさそうだ。春の喜びに溢れて。

前の日に指で音頭を取った母思わなかつたよ亡くなるなんて 鈴木知子☆

指で音頭を取ったりして元氣を取り戻したかのようであった母君がその翌日に亡くなってしまわれた。あまりの意外さに作者はさぞ落胆されたことだろう。下の句が深い悲しみを吐露する。

作品二

ランチ

新井 光雄 ☆ 東京

ホテルから東京タワーを眺めつつランチを二人でプティのコースで
ナイフ・フォーク面倒なるもホテルでは箸をと言うには気が引けるもの
メインデッシュ三種のあれば案外に苦しむものよその選択に
コテド・アニョー妻はあっさり選択す我は迷ってほほ肉ワイン煮
目の前の東京タワーは一度だけ妻と登った退職の時
一人前六千円は贅沢か年金暮らした飲み物見送る
ジュースでも千円はするビールなら千七百円馬鹿にできない
ランチ後に初めて観るは劇団「四季」ミュージカルなり「アラジン」という
四季ごとにランチの後に観劇かオペラかお能か歌舞伎でもよし

後藤 恭介 ☆ 茨城

いただいた鉢植えの君子蘭花咲きぬアフリカ産の朱の色の花
ロンドンのテレビで見たる駅ピアノ異国の人の弾いて楽しむ
早朝に妻出発す太極拳水戸まで行くらし一日研修
居酒屋に七人集う同窓会高齢者にて人生語る

冬雷の付録の歌集読み終えて卒寿の先輩の刊行嬉し
日常の心情詠める歌数多小さな気づき大切にせん
カラオケは十一名のシニア達ゆっくりまわる曲の数々

越澤 太朗 ☆ 茨城

台風一過ハウスに走り育苗の野菜の様子確認安堵す
遠方の筑波の峰を仰ぎつつ風の便りにともどち想う
順調に育つじゃがいも「男爵」に一陣の風吹き抜けてゆく
トラクター耕運終えて一服すそよ風吹いて雲流れゆく
風ありて万物育つと思ひおり自然の恵みに感謝忘れず

今野 澄子 山形

見上げれば真綿引く如く広される五月最後の朝空の雲
住む人の無き友の家手入れ良く花に囲まれひっそりと建つ
チラシ見て食べたいものを幼児は指差して摘み口に運びぬ
山菜の盛り沢山の天麩羅の春の香りは部屋中に満つ
カラフルなランドセルの子らの声弾む連休明けの集団登校
懐かしきラーメン店は満席にて手書きの品書きあの時のまま

長谷川 剛 山形

戸を繰れば満開に咲く山つつじと残雪映える飯豊の山見ゆ
少年の澄み透る歌声に時を忘れてドナウに浸る

新田の田植ゑが終へて蛙鳴く隣は放棄されたるたんぼ
カーナビがいつも私に告げてくる「事故多発地点気をつけて走れ」
亡き父の皐月の盆栽咲き初める枝振り花々面影残して
最上川夕日を浴びて海に入る庄内平野の植田潤して

ドック前にいつも気になるY・GTPひと月前から禁酒続けむ

長澤 千恵子 山形

同年の訃報続きてわが歳を数へてみればそんな年齢

蔵王山の御釜を望む晴れの日に熊すずつけて御朱印貰ふ

山菜のわらび貰ひて灰汁を抜く手間ひま掛けて旨くなりたり

つれあひを介護する友弱りたり杖つき歩む一步一步を

母の日に子よりケーキの届きたり見た目と味と嬉しい心

早朝のドライブ兼ねて水没林へ野外楽しむ老いも若きも

松田 忠一 ☆ 山形

さくら咲く休線の駅舎のその向こう見守る如く白き山脈

待ちわぶる桜前線とどけどもはや花吹雪北へ向かいぬ

皐月晴れの早蕨の丘友とゆく偲ぶは二十歳ゆめ多き日日

残雪の飯豊の山脈見はるかし数馬わらび野日なた風清か

今宵また早苗の水田に蛙鳴く巡る季節をしみじみと聞く

こころ潤むピアノ奏でる「愛の賛歌」想い出溢るドライブの旅

瀬波の海風のかなたの鳥影よ連絡船か小さくひかる

児珠 純子 山形

よく見れば夫の眉毛伸び放題つまんで計れば四センチあり

電動のシェーバー使ひ剃髪す入浴前の夫のルーティン

もう四年床屋に行かぬと言ふ夫に眉の整へ勧むるわれは

僧侶なりし義父の眉には及ばぬと「まだまだ伸ばす」と夫は笑みぬ

朝ごとに鏡に向かひ眉を描く自分好みの薄茶の色で

グレイヘアにして三年半となる母・義母の亡きあとにわれも始めて

良寛に白髪を詠みし歌ありき「頭に降りて消えない雪」と

亡き祖父は良寛慕ひて歌詠みきわれは倣ひて歌書き写す

まだ呼んで貰へる孫はなけれどもじいちゃんばあちゃん等の我等の風貌

河原木 光 子 ☆ 広島

オレンジの帽子の夫の近づきて二人すれ違う朝の公園

裏山を一時間歩く夫とはなれそれぞれ歩く朝のルーティン

影見えず山道行く人咳をするその咳聞いて夫と認識

墓地へ行く百余の石段登りたり向かいの山の端朝霧の頭つ

この春も二人暮らしに充分な大ざる二つのメイクイン採れたり

葉やひげの捨てるところは多けれどヤングコーンの天ぷら旨し

冬用のクッションカバーは一日に直線二本のキルト刺しゆく

鈴木裕子☆千葉

母猫が子猫五匹をつれてきて「こんちよろしく」と雲隠れ
小さな手ボトルに添えて必死に飲む生きる力を私に預けて
黒黒キジトラ五匹の子猫の並びいてミルク飲む何をして愛おし
うっすらと開くキトンプルー意志を持ち塊から今「猫」へと変わる
それぞれが良い人々にもらわれて安堵しかない空の段ボール

塩野伸山形

土砂降りに中断したる夏ゴルフ晴れて天国否地獄かな
見えぬ眼を助けられつつ夏ゴルフ人に頼るも嬉しと思ふ
夜もすがらスマホに取り憑く悪魔居て雄鶏鳴くも居座り続く
父母と蚊帳に眠れる夢を見るあしたは母の命日なりぬ

倉田ひろみ☆広島

すでに肺の呼吸をはじめいるらんか孫誕生の連絡を待つ
気にしつつレッスンを受けスイミングのロkkerールームで誕生を知る
医師の手で取り出されたる孫二人保育器の中に守られており
胡蝶蘭の白き蕾はゆつくりとふくらむ赤子のほっぺのように
無防備に眠る赤子の傍らに祝いの鉢の胡蝶蘭咲く
新生児微笑は反射と知りつつも笑顔見るたびほっこりとする
叫ぶ娘の手元を見れば乳呑み児のクリームみたいなきれいなうんち

真夜中にスマホの光かざしつつ娘は双子のミルクを作る
赤ちゃんの世話は毎日前かがみ腰を伸ばせば今日は筋雲

鈴木知子☆埼玉

仏滅に入籍をする孫娘彼と出合った大事な記念日
高原の遅き春野で蕨採りほろ苦き味初物を食ふ
嘴を大きく開けて餌受くる孵ったばかりのヒヨドリ三羽
急かされてヒヨドリの雛巢立ちたり親鳥の声に緊迫感あり
連れ添いて五十八年経つ我等あれこれそれでおおよそ分かる
杏の実梅雨入り前のひと仕事ジャムの香りが厨房に満つ

お知らせ

小誌では東京での歌会開催を休止しております。いまだ人数ながら動いている歌会は、川越歌会と佐野支部の歌会です。佐野支部からは、高橋説子氏から時々情報が入ります。

佐野支部例会は、毎月第三金曜日、十一時からです。ふだんはグループラインでおしゃべりしていて、例会前には、出欠をライン上で知らせ、六人中三人出席しないと中止です。仕事されてる人の方が多いので、なかなか全員出席は稀です。

このことであります。

六月の川越歌会も、接近する台風のために急遽中止となりました。高齢者が多くなると、環境の変化には注意せねばなりません。その川越歌会ですが、八月は危険な暑さが予想されますので中止としております。

ホームページの中で行われている「ネット歌会」の方は、桜井美保子氏が係となつて毎月運営されています。会員なら参加する権利がありますので、ふるってご参加願います。ちょうど今月の目次上、編集後記にも、情報が記されています。わからぬ点は桜井氏宛にご質問願います。〈編集室〉

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記⑤

大山敏夫

リメイクされた歌集『渚』が「柳」に改名されたのは不満だが、『柳』によってその作品群が「舞台時代」と「映画時代」にきちんと分けられ、作品制作順に並べ替えられたのなら背景が明瞭になって良いことだと評価する。『渚』では舞台と映画という背景の違う作品が隣り合い、しかも制作年も前後するような煩雑さだったところが整理されたのだ。

歌集『柳』そのものを観たという話が殆ど伝わらない中で、『大友柳太郎快伝』の中に抜粋掲載されている歌集『渚』の二十首は、どうやら『柳』からの抄出らしいことが判明し、その中でも少し誤植が遺ったようだが、新仮名遣い表記に変わり作品制作順掲載に変わり、一部に改作も見られることは、貴重な資料としての価値が高まったことになるだろう。

芒の中のちひさき平家

昭和十二年九月作というこの歌は少しく改作されている。四句の「芒」にルビが付き、結句が「小さき平屋」に」と読み方を変え助詞の「に」を添えた。敢えて「ひらや」に拘るよりルビを付けて平屋をイメージさせる方法を選んだのだろう。京の嵐山の作品で、ここに住みたいと念じるのは映画人にとって特別な場所だったことが解る。

昭和十二年という、新国劇でも映画人としても大スターだった先輩の大河内傳次郎が、すでにこの地に土地を買い「大河内山荘」を設計し少しずつ作り始めていたという背景もある。勿論いまのような大自然庭園が出来ていたわけではないが、膨大な構想の夢御殿であったわけで、大友はそれも視野に入れて、自分と比較にもならないけれど…の意味を込めて「小さき平屋に」と言った気がする。新仮名遣いへの変化と、記号「ゝ」を普通表記に変えたのみの作品については省く。そして十五首目、

むろん分かつている限りでしかないが、どのように変化したのかを掲載順に探ってみたい。まず新国劇時代の作品。

3 たち出發る朝を家の父と酌む
酒のぬるさよ胸に沁み入る

昭和八年一月作というこの歌は、一句目が「出づる」となり、三句には「父と酌む」とルビが付き四句目が「酒のにがさよ」に改作される。「ぬるさ」は肉体的感覚で、「にがさ」は心情的かと思う。そして、次は4首目となる。

4 孫がもう欲しとのたまふみことばを
切なくきいて巡業に出づる朝

昭和九年二月作のこの歌は「ははそば」の一連にある。新仮名遣いの箇所は省き、繰返し記号「ゝ」は「ききて」に直し、結句を「出づるも」とする。「出づる朝」では字余りだし、詠嘆の「も」に変えた。掲載された十首目からは映画界に入ってからとなつていたので、舞台時代は九首選ばれ、その配列が大幅に前後動いているものの、大きな改作はない。そして十首目、

10 スクリーンに動く貧しき吾が姿
じつと目をとぢ息をこらすも

昭和十二年一月作というこの歌には「―試写の夜に―」の詞書が付いているので、デビュー作の「蒼空浪士」の完成後かと思われる。初めての映画、しかも主演の自分の演技を緊張して観ている姿が手に取るように伝わってくる。大友は後年、映画は便利なものだ。自分の背中が見える／というのが新国劇から映画入りした時の感想だったと言ったそうである。この歌には改作はない。

そして十一首目、

11 うちつゞく徹夜のセット出で来れば
目に沁み渡る五月晴れかな

昭和十二年五月作というこの歌は、記号の「ゝ」を訂正し「つづく」とする。五月作というので、映画は「吉田御殿」の撮影中のことか。山田五十鈴が千姫を演じ、大友は坂崎出羽守の元家臣の役どころ。六月三日封切り。

そして十二首目、

12 よき人と住まばや秋の嵐山

15 故里の潮の遠鳴りきかずなりて

あゝわれ八年都に住まふ

昭和十三年一月作というこの歌は、初句に「故里」とルビを付け、「われいくとせ」と改作し、「すまふ」と平仮名にする。この作品はなぜか記号「ゝ」をそのままにして、結句も旧仮名使いのままになっている。初句にルビを打つと短歌としてはリズムが悪くなり破調化するのので、この改作は「？」である。新仮名遣いにもなっていないので、これは『大友柳太郎快伝』抜粋歌編集の時に生じた混乱誤記かと思いたい。要は「八年」の具体的数字を「いくとせ」と少し曖昧にしたかっただけなのかと考えられる。

そして十七首目、

17 何もかも吾がする事の氣に入らぬ

侘しき日々のつゞく事かな

昭和十三年八月作というこの歌、これは拙著『歌集「渚」鑑賞』でも触れたが、かなり熟考して効果的な改作を遂げている。一首の中に「事」が二つある欠点を二句を「演技」に直して回避したのだ。

この歌作の年月から推測すると、映画「おしやれ狂女」（寿喜多呂九平監督）「振袖若衆」（木藤茂監督）のどちらかでの歌か。演技での一種の行き詰まり状況を思わせ、歌作も苦しんでいるが、仕事の方でも悩みは深そうである。次の、

18 疲れたる心一つが残されて
今日も空しくセットを出づる

昭和十三年十一月作のこの歌でも苦しみは解消できていない。これは映画「忍術関ヶ原 猿飛佐助」（森一生監督）撮影中か。そうして最後に人みな希望の希ひなれども吾れもまた悔いを残さぬ生活をしたし」という昭和十四年九月の歌集刊行月になる作品で締め括る。歌集『渚』が刊行された直後で、映画「隠密姫」（木藤茂監督）に向けて一休み時期か。



↑ 映画「隠密姫」の上映予告。
新興ニュース No. 37

『時のクレバス』を読む

桜井美保子

本集は著者の第十歌集で平成二十六年から三十年までの六七二首と令和七年四月から十二月までの作品一五六首を収めている。あとがきには肝臓癌と胆管癌、背骨の圧迫骨折、腰痛や膝痛に苦しんでいるが短歌は命の滴であり、その滴が途絶えるまで短歌は続くであろうとある。

「老いは財 病は宝」 これをもて身の芯に据ゑ歩む年とす

誰でも老いと病には悩まされる。マイナス思考をプラスの方向に向けて強く生きる姿勢を歌う。本集の帯文に「人生の裂け目に立ち止まり、なお歩む者のための一冊。」とあり鑑賞の助けとなった。

道の辺に咲ける菫のこむらさき生きるといふは耀けること
砂糖を入れ忘れたと言ふじやがいの煮つころがしが結構美味し

今朝は少し濃すぎましたなどと言ひ
仏壇の母に緑茶を供ふ
温もりを欲しくなりたりおいお茶
と心に言ひつつ自販機に買ふ

出窓にはサンセベリアの大小五鉢く
らし豊かなに照らして来たり
飾らない表現で詠まれた日常の日々。

どれも身近な題材を取り上げているが深い味わいがある。

老麗はうるはしく老い麗しく死する

ことなり山茶花の花

幼児の頭上に赤き風船をふはりと浮
かす老麗のトス

麗しく老いて麗しく死ぬことは難しい
がそういう心でありたい。未来を持つ幼
児の頭上にふわりと風船でトスをあげる
作者。幼き者への優しい眼差しがある。

戦争反対は戦死の父の遺言としてわ
が生涯の心柱とす

沖繩に思ひを越える洞窟のあり戦時
のさまの再現をして

人間がけだものや鬼畜になる過程
沖繩戦の展示語れり

父を戦争で亡くした作者であるから、
沖繩の旅は特に印象の深いものだったの
ではないかと思う。

重篤な吾の病の確定し妻の柔かな目
とであひたり

疲れたる八十四歳の眼を楽しめますよ
はひ百五十歳の藤の花園

うすあぢの味噌汁一日一杯は医師の
許可あり生きる力に

連れ合ひて手押し車で散歩する冬の
道辺にタンポポの笑み

闘病を支えてくれた妻との日々が歌に
輝きを加えて読む者を励ましてくれる。

昨日に戻れず 明日は選べず 運命
とふは時のクレバス

金子貞雄氏は一九四一年埼玉県生れ。
一九六四年「作風」に入社し、大野誠夫
に師事。二〇一四年から二〇二六年二月
の終刊まで代表を務めた。本集の紹介を
書いている途中、著者が四月八日に逝去
されたことを歌壇の新聞で知った。心よ
りご冥福をお祈り申し上げる。

(本阿弥書店刊)

歌集/歌書
御礼

編集室・佐藤靖子

■杉本明子歌集

『窓に待つ』

令和八年二月一日発行、三四〇首の第五歌集である。平成二十五年から令和七年まで年ごとに区切っており、その十三年の間に外国だけでも八カ国、国内では遍路二回ほか能古島、屋久島など各地の旅行詠がある。「短歌21世紀」選者。ところで題名の「窓に待つ」とは何を待つのだろうか。それは次の作品に詠われている。

その声を朝々窓に待つ鳥の今朝は来たら
ず窓澄みに澄む
外国詠から。

軍隊を持たぬ国と吾が知れど鉄条網に家を覆へり (コスタリカ)
満月に身を慎むと国人の祈りの声は朝より満ち満ち (スリランカ)
にはかななる風に音立つバオバブの梢たかきに南十字星 (マダガスカル)
防犯カメラの歌が二首あった。

あの角を曲がれば最後の防犯カメラ背筋
伸ばして廊下歩まむ
いく台の防犯カメラに映りしか吾の日々
かななるひと日
景色など。

掻い掘りの泥より亀はおもむろに若葉の
風に首伸ばしたり

地下鉄へ下り行く若き黄衣の僧ワイヤレ
スイヤホンその耳にして

簗は大きく靡きしづまれり雨吹く風の呼
吸のままに
著者の住居からは。

北窓に朝夕望む筑波山けふ登り行く青葉
木下影
(本阿弥書店刊)

■浜口美知子歌集

『不如帰いづい』

令和八年二月二十一日発行の第三歌集、この二十年間の作より六九二首を収めた。この間は夫の逝去、娘婿の急逝、百二歳義母の逝去、自身の心臓病等々、哀しみが続いた。死後の夫に、見守ってもらっているという意識が集全体に漂っているようだった。

夫を詠えばその人柄が伝わってくる。

鳴くまでを待つ夫なりき不如帰はや聞き
たしと吾は思ふに
夢に向かひ進めと亡夫のこゑ風にけふも
聞こえ来 窓開け放つ ……これは文芸同人誌「糸車」を創刊した時の歌である。

右の例でも活動的だと思いが、著者には剣道の歌もある。また越谷市剣道連盟女子部創立二十周年記念歌の作詞も担当し楽譜付きで集中にある。

正眼に竹刀構へて蹲踞する姿勢たちまち
太ももふるふ

師の見する馬庭念流剣先の一閃何の躍動
を斬る

剣道だけでなく、
新車いく台乗り継ぎ来しか十九よりハー
レーにも乗れる免許証返納

夜空を見ることが好きらしい。始まり一行
目に天狼と詠み、もう一首はシリウスと言
いで。

南天を統ぶるがときシリウスの青冴え
冴えと孤高を放つ
旅も沢山重ねている。明日香を詠んで。
コンピニもビルも建つなく万葉のこころ
育む明日香の人ら

白鷺が悪者に見え面白い歌、

生き方の基本となったような一首。

父の教えが今も心に存続しているのが「たり」の結び方で伝わってきた。

（響叢書第四六篇） ながらみ書房刊

■ 奈賀美和子歌集

『時のほとり』

令和八年三月十七日発行の第七歌集、三五一首を収めている。「星座α」選者・顧問。情報を視覚化するのに長けた歌が沢山あった。思いがけない角度から微妙な感じを掬いあげるのだ。先ず風の表現から。

此処でない此処ではないと言ふごとく樹

林を風が音たてて過ぐ

大楠にこもらふ風のうち迷ふ統ての方位

ひらかれをれば

影がよく詠われている。

かそかなる風を伴ふ病む夫のこゑがこの
身に沁み透りゆく

径ひとつ曲がる時の間このわれ

みたる影のもどり来

冬の日の反照あはき午の街かたちとなら

ぬ影ひきてゆく

水を見て。

ひたすらに水がみづ追ふ流れ見ゆ瀬音の

ふいに高まるところ

みづからを棄つる遊びとおもふまで噴き

て散りばふ噴水のみづ

看病し見送った夫のこと。

短歌総合紙・月刊 年間定期購読6000円(税・送料込)

うた新聞

おかげさまで創刊14周年！

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集 全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの舎まで

〒一五五〇〇三一 東京都世田谷区代沢五一三一五 シェルボ下北沢四〇三
電話 〇三一六四一三一八四二六 ファックス 〇三一六四一三一八五二六
メール chumon@rimosha.com

第65回冬雷大会（誌上大会）用詠草（未発表作品一首・冬雷に掲載予定のないもの）

・（ここから切り取って投稿することもできます・キリトリセン）

* 本年は「誌上冬雷大会」のみとなりました。ただし、会員の全員出詠は是非とも継続したいものと思います。

お名前

ご住所

⌊

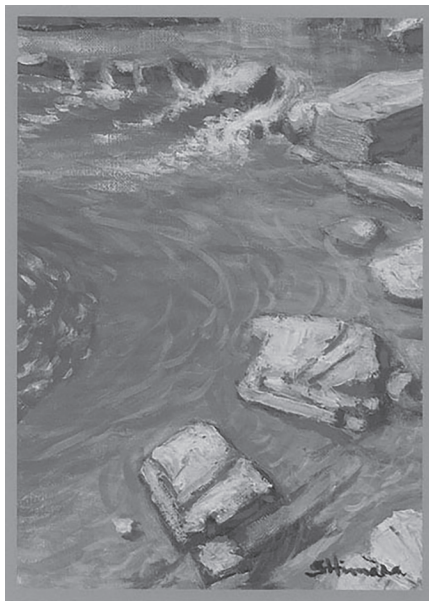
九月十日 必着

☆会員は全員出詠が義務づけられております。
出詠費 一〇〇〇円（詠草制作・郵送費）をそえて、
下記へお送り下さい。

送り先 〒125・0063 葛飾区白鳥四・十五・九・四〇九

小林芳枝宛

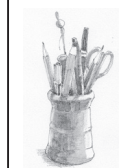
☆楷書で分かり易くお書き下さい



第 65 回冬雷大会

出詠参加者互選における第一位の作者
には、発行所所有の上の画像（小誌
2020 年の表紙絵 / 嶋田正之画伯作品）
原画が贈られます。〈冬雷短歌会〉

編集後記



▽本号巻頭の「ペーパーレス化 電子書籍運用へ」の大山編集長の文章には少々驚かされた。今すぐどうということはないが、将来的には電子書籍の形で発行を続けることも運営上の一案かと思う。ホームページでは毎月最新号を掲載しているが、もっと多くの人に「冬雷」を知ってもらうにはどうしたら良いのか。そのことも含めて編集長より国立国会図書館のデジタルコレクションにPDF版「冬雷」を寄贈してはどうかという提案があった。私は広報として、今その実現に向かって取り組んでいるところである。

▽小誌も大改革を迫られ、目下三年間の短期計画の最中である。短歌結社誌の運営というものも、その規模や環境によってそれぞれ微妙に違い先ず自らの能力や体力を識るところから始めねばならない。冬雷大会を誌上版に決定したのも時の流れか。

▽今月の「応接室」には、作歌上の文法の師と仰ぐ岩崎聰之介先生から特別作品を賜った。ジムに通って躰造りにも徹しておられ、添えられた写真も堂々たるお姿である。

▽大友柳太朗が昭和三十年に再編集刊行した歌集『柳』を探して古書業界をチェックしているが、見つかる可能性は極めて低そうだ。そこで今分かっているのはほんの一部なのだが、どのような事実、変化が見られるのかを考察してみた。

▽今月の応接室にお出でくださったのは岩崎聰之介氏。愛車のバイクと最後の走行となつた大切な作品である。時には飛んでいる蝶にぶつかることもあるのだろうか。力強くてやさしくて潔い。

▽高橋輝次氏の連載は篠弘氏の作品を挙げながら編集者として本を造りあげるまでの作業を解説して下さった。一冊の本を完成させるまでの努力と苦勞を少しだけ感じる事が出来たようで有難い。

▽編集長の「歌集『渚』鑑賞 補記」を読みながら一首の中の一つの言葉の後から訂正したくなる作者の気持がよく解る。歌集『柳』にはどんな歌があるのだろうか。

▽毎年楽しみにしている「冬雷大会」は誌上での大会となつた。会場まで来ることが難しくなつた方々も誌上での大会にはご参加くださるようお願い致します。

▽御寄附御礼 湯川 攝子様 (小林芳枝)

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む) 次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

*会費は原則として振替にて納入する事。

- | | |
|--------------|--------|
| A 作品三欄所属会員 | 一四〇〇〇円 |
| B 作品二欄所属会員 | 一七〇〇〇円 |
| C 作品一欄所属会員 | 二〇〇〇〇円 |
| D 維持会員(二部購入) | 二六〇〇〇円 |
| E 購読会員 | 八〇〇〇円 |
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
- | | |
|-------------------|-----------|
| 冬雷集・作品三欄(メール投稿分) | ・担当 大山 敏夫 |
| 作品一欄 | ・担当 桜井美保子 |
| 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分) | ・担当 小林 芳枝 |
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に依じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- Eメールによる投稿は左記で対応する。
- | | |
|-------|-------------------------|
| 大山 敏夫 | tourai-oyama@nifty.com |
| 小林 芳枝 | kysie@nifty.com |
| 桜井美保子 | mihoko496@s4.dion.ne.jp |

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎ 090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎ 03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎ 090-6029-0590

2026 年 8 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>



小誌 QR コードです。
ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
32	30	28	13	103
(- 1)	(- 2)	(0)	(0)	(- 3)

* 上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。